

第13回 里山シンポジウム in 南房総 報告書

第13回
里山シンポジウム in 南房総

2016年7月7日

里山シンポジウム

里海の恵みと命

南房総お国じまん

2016年 **5月15日** 日
10時～17時

南房総市立嶺南中学校和田校舎

- 里山シンポジウム分科会
- 基調講演 延藤安弘
地域の魅力のタンケン・ハッケン・ホットケン
～「風の人」と「土の人」の出会いのデザイン～
- 南房総お国じまん報告
司会:安馬谷里山研究会 横山武
コメンテーター:イオンリテール株式会社
食品商品企画本部 千葉泰彦
活動紹介パネル展示もあります

申込不要
参加費500円

テーマ題字:倉島貴浩 デザイン・イラスト:松下優子

主催 里山シンポジウム実行委員会・里山シンポジウム南房総実行委員会
共催 南房総市・南房総市教育委員会 後援 千葉県・館山市・鴨川市・鋸南町・房日新聞社
協力 公益社団法人千葉県緑化推進委員会・NPO法人千葉自然学校・NPO法人ちば里山センター

2016年テーマ

南房総お国じまん

里山 里海の恵みと食

2016年5月15日(日) 10時~17時

場所:南房総市立嶺南中学校和田校舎

黒潮・親潮により南北の生物が会える南房総は、世界屈指の生物多様性の宝庫であり、きわめて豊かな山の幸・海の幸の地域です。外からの人(風の人)にとってその魅力的な里山里海のめぐみも、土地の人(土の人)にとっては、つねに身近なものでありその貴重さに気づかないこともあります。もちろん風の人を知ることのできない、土の人が大切にしている土地の宝もきっとあるはずで

このシンポジウムでは、海が見える会場で「風の人」と「土の人」とが交わってたくさんの土地の素晴らしさを発見・発掘し、南房総の新たな魅力と誇りにしていきたいとおもいます。

昼食について

各自でご用意ください。なお、南房総特産弁当を700円で販売します。事前申し込みが必要です(090-5515-2455 遠藤まで 締切 4/30)。このほか、当日販売も若干あります。

プログラム

- 9:45 **開場** (敬称略)
- 10:00 **分科会**
- ①里山~里海~ 私たちにできること (NPO法人たてやま海辺の鑑定団・安房ふんころがし)
 - ②人から人へ~地産地消の食・郷土料理 (NPO法人千葉自然学校、NPO法人大山千枚田保存会、NPO法人ちば環境情報センター)
 - ③南房総産健康茶 (NPO法人えふぶんのいち計画)
 - ④今ある豊かさを生かす!大人の体験型.美味しい遠足 (3.P.m.さんじ.アレル農園)
 - ⑤安房拓心高校の取り組み・学校紹介 (安房拓心高等学校)
 - ⑥一年中桜の咲く里山づくり&南房総セラビー (安馬谷里山研究会、たのくろ里山保存会、大貫古道の会、NPO法人千葉自然学校)
 - ⑦房総捕鯨の今と昔 (NPO法人ネイチャースクールわくわくWADA)
 - ⑧白浜里見古道再生と、はぐくみ活動(白浜地域づくり協議会『きらり』じょうやまの会)
 - ⑨南房総ロマネスクー紙芝居一 (NPO法人富浦エコミューゼ研究会)
- 11:30 **休憩**
- 13:00 **全体会開会** 司会総合 小西由希子
挨拶:里山シンポジウム実行委員会代表 並木秀幸
里山シンポジウム南房総実行委員会会長 横山武
南房総市長 石井裕
千葉県 南部林業事務所長
- 13:30 **基調講演** 延藤安弘
地域の魅力のタンケン・ハッケン・ホットケン
~「風の人」と「土の人」の出会いのデザイン~
コメンテーター:中村俊彦
- 14:20 **休憩**
- 14:30 **分科会報告**
- 15:00 **南房総お国じまん報告**
- 南房総市
・富浦地区 鈴木勇太郎 (NPO法人富浦エコミューゼ研究会)
・富山地区 松本貢 (いわい案内人の会)
・三芳地区 菅沼弘夫 (里山わんぱく塾)
・白浜地区 栗原猛 (じょうやまの会)
・千倉地区 石井賢司 (たのくろ里山保存会)・竹林幸雄 (大貫古道の会)
・丸山地区 上野勝美 (学識経験者)
・和田地区 小原靖喜 (道の駅「和田浦WA・O!」)
館山市 竹内聖一 (NPO法人たてやま海辺の鑑定団)
鴨川市 石田三示 (NPO法人大山千枚田保存会)
鋸南町 篠原茂幸 (元名花街道)
- 司会進行:安馬谷里山研究会 横山武
コメンテーター:イオンリテール株式会社 食品商品企画本部 千葉泰彦
- 16:40 **閉会**
挨拶:里山シンポジウム実行委員会 風間俊雄
- 17:00 **終了**

「土の人、風の人」の言葉の生みの親

地域の魅力を発掘する視点について講演

基調講演 講師 延藤 安弘

PROFILE



1940年大阪生まれ。専門は生活空間計画学。熊本大学教授、千葉大学教授、愛知産業大学教授、国立台湾大学客員教授を経て、2003年からNPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事。千葉大学の教授時代の1999年から2002年、NPO法人千葉まちづくりサポートセンター初代代表として千葉県内のまちづくりに関わる。

ACCESS MAP

南房総市立嶺南中学校 和田校舎
所在地:南房総市和田町海発1602



●JR内房線南三原駅より徒歩約12分(1.0km)
●お車の場合、富浦ICを降りて25分

目 次

開会挨拶		1
里山シンポジウム実行委員会代表	並木秀幸		
里山シンポジウム南房総実行委員会会長	横山 武		
南房総市長	石井 裕		
千葉県南部林業事務所長	朝川康彦		
分科会報告		5
第1分科会	里山～里海～ 私たちにできること	5	
第2分科会	人から人へ ～地産地消の食・郷土料理～	7	
第3分科会	南房総産 健康茶	9	
第4分科会	今ある豊かさを生かす！大人の体験型、美味しい遠足	11	
第5分科会	安房拓心高校の取り組み・学校紹介	13	
第6分科会	一年中桜の咲く里山づくり&南房総セラピー	15	
第7分科会	房州捕鯨の今と昔	17	
第8分科会	白浜里見古道再生と、はぐくみ活動	19	
第9分科会	南房総ロマネスクー紙芝居ー	21	
台湾の里山事情		23
基調講演		25
「地域の魅力のタンケン・ハッケン・ホットケン」 ～「風の人」と「土の人」の出会いのデザイン～	延藤安弘		
延藤先生との出会いと学び	コメンテーター 中村俊彦	36
地域開催分科会報告		38
里山再生から活かされている里山活動（生物多様性万華鏡）/ 谷当地区 里山に、新たな参加者を、呼び込みたい！/ 地域の活動：「東京湾干潟の風景」展覧会と三番瀬自然観察会 / 「ふなばし夏ボラ」研修（中学生～高校生～大学生）			
南房総お国自慢		41
南房総市 富浦地区・富山地区・三芳地区・白浜地区・ 千倉地区・丸山地区・和田地区 / 館山市 / 鴨川市/ 鋸南町 お国自慢を聞いて	コメンテーター 千葉泰彦	59
協力団体		60
会場風景		69
閉会挨拶	里山シンポジウム実行委員 風間俊雄	72
風間俊雄さんを偲んで		73

13回 里山シンポジウム開催にあたって

里山シンポジウム実行委員会 代表 並木 秀幸



本日は、ご多忙のところご来場いただきまして誠にありがとうございます。13回目の里山シンポジウムを開催するにあたり、南房総市様、南房総市教育委員会様をはじめ、千葉県様、館山市様、鴨川市様、鋸南町様、房日新聞社様、公益社団法人千葉県緑化推進委員会様、NPO法人千葉自然学校様など多くの皆さまのご協力をいただきましたことに改めて感謝いたします。

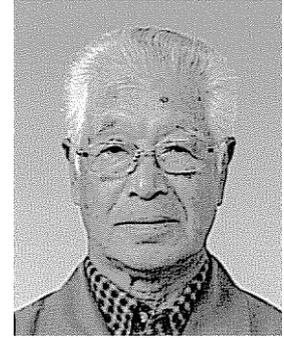
今から12年前、ここ南房総市において開催されました「里山フェスティバル」が、我々、里山シンポジウム実行委員会のスタートであります。以来、千葉県内の各地を会場とし、毎年5月に里山シンポジウムを開催して参りました。12年間の取り組みの中で我々は、千葉県の里山の魅力や地域が抱える課題、里山が持つ可能性や意義について、学びを深めて参りました。

我々は、里山里海とは未来の世代に引き継ぐべき無二のシステムであると考えます。里山里海は、食料やエネルギーの生産の場として重要なだけでなく様々な機能を併せ持ちます。例えば、子ども達にとっては脳の健全な発達に不可欠な遊びと学びの場です。また災害を考える上でも、減災において重要とされる「いなし」の仕組みを里山や地域の伝統文化から学ぶことができます。更には、里山里海が有する生物多様性には、数値化が難しい様々な価値が存在します。持続可能な生活様式を考える上で、我々が里山里海から得るものは、想像以上に大きなものではないでしょうか。

ここ南房総は、黒潮と親潮が交わる世界でも屈指の生物多様性を誇る土地であり、地元の方々の様々な取り組みも行われています。それらは、我々のような外部の人間には、とても魅力的なものに映ります。本日のシンポジウムにおきましては、我々、外部の人間の視点と地元の皆さんの視点、双方の視点から今一度、南房総の里山里海が持つ魅力を探り、また学び合うことができればと考えております。今日一日の成果が、持続可能な社会を築くために有意義なものとなりますよう期待し、挨拶とさせていただきます。

平成28年5月15日

ごあいさつ



里山シンポジウム南房総実行委員会 会長 横山 武

皆様ようこそ、南房総市嶺南中学校和田校舎にお越し頂きまして、ありがとうございます。

「里山に託す私たちの未来」のもとに、第13回里山シンポジウム in 南房総、「里山、里海の恵みと食」をテーマに、今回の大会が開催されました。本日ご来場の皆様には、ご多忙中にもかかわらず、ご出席頂きまして、改めて御礼申し上げます。本日、5月15日をベッドの上で迎えるとは、夢にも思わなかった私ですが、里山シンポジウム実行委員会の皆様を始め、関係者一同のご努力により、この大会が開催できたことを、重ねて感謝申し上げます。

千葉県5月の海辺は、さわやかな風に乗って、磯の香りが流れ、水平線を眺めていると、体が若返る気分になります。里山の木々の緑は、毎日少しずつ変化し、若葉の勢いが体を包みます。私も木と共に、自然の中で伸び伸びと、生かされているのだと思います。

何の目的もないように見える雑木林を、利用する方法がないかと考えたことが、私の里山づくりのスタートです。幸いなことに、日本は一年中桜の花が咲きます。そこで一年中桜の咲く里山づくりを考えたところ、関係者のご協力のもとに、少しずつ桜の苗も成長し、花見が楽しみになりました。

雑木林は、地形の良い所、2割位を草地にします。昔の人は「山でおいしいは、オケラとトトキ」と云いました。山菜を増やして、春には、自然の恵みを味見してはいかがですか。三つ葉、野ブキ、ワラビ、ヨメ菜、ムコ菜も楽しめます。黒文字の木は、花が黄緑色で上品であり、秋になると葉が黄色になり、幹や枝は健康茶としておいしいです。このお茶を飲むために、黒文字の苗木を植えてみてはいかがですか？安馬谷里山にも苗木があります。静かな里山、里海は無限の安らぎを与えてくれます。私共も、優しい気持ちで、里山づくりの活動をしたいですね。

今後、地元の里山、里海を再発見するために、足を使い、お互いの活動場所を訪ねて南房総の魅力を生かせる組織を作り、新たな生きがいにしたいと思っています。

皆様に、いつか、里山、里海について、楽しい会話ができる機会があることを、心からお祈りしています。

(代読 副会長 栗原 猛)

「第13回里山シンポジウム in 南房総」の開催に寄せて



南房総市長 石井 裕

本日は、日頃から里山里海で活動していらっしゃるみなさまにお集まりいただき、当地を会場にして第13回里山シンポジウムが開催されますことを心からお祝い申し上げます。

私はまだ50代ですが、自分が育った頃と比べてふるさとの自然が変わってきてしまったと感じます。日本はもともと四季に恵まれ、多種多様な動植物がいて豊かな環境であったのですが、それが荒れてきているように思われます。豊かな自然の中に入り自然と戯れることが、人間にとって必要なのです。そういう環境の中でこそ、本来の人間を取り戻すことができると強く感じます。私たちが住んでいるこの里山の自然環境を守っていくことが大切なのです。これからは、守るというよりむしろ、元に戻していく活動が必要かもしれません。

南房総の中でもいろいろな活動している方たちがいて、多様な自然環境があります。せっかくの機会なので南房総市の取組を少し紹介させていただくと、当市の豊かな自然環境を活かして、県内で唯一の森林セラピー基地に認定されています。合併した7つの旧町村がそれぞれセラピーロードを指定しております。セラピーロードは医学的にも「癒しの場」としての効果が高いとされています。このセラピーロードを、地域の方たちの活動と連携しながら、もっともっと地域の外に発信していく所存です。

今の南房総市の里山はマテバシイやスギの人の手が加わってできた森林ですが、それらを守り、外からのアドバイスもいただきながら、元々の自然環境を取り戻すために活動に取り組んでいきたいと考えております。

本日の里山シンポジウムを契機に活動の輪が更に広がることを願って、挨拶とします。

「第13回 里山シンポジウム in 南房総」開会あいさつ

千葉県南部林業事務所長 朝川康彦

本日は、里山シンポジウムが第13回を迎え、このように盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

実行委員会の皆様をはじめ、里山活動団体の皆様方には、日ごろから里山条例の基本理念にのっとり、里山の整備や活用に汗を流していただき、厚くお礼申し上げます。

また、このシンポジウムの準備に携わってこられた多くの方々の努力に深く敬意を表する次第であります。

さて、千葉県では平成15年に里山条例を制定して以来、地域における様々な里山活動を促進してまいりました。

現在では、多くの里山活動団体の皆様、森林所有者の皆様、の取組みのおかげで、団体数は知事認定を受けておられる団体だけでも累積で86団体となり、整備している里山等の面積は191haに及んでおります。

また、里山協定の知事認定を受けていらっしゃる団体も含めれば、何らかの整備している里山は、370ヘクタールを超えています。

さらに、平成25年度からは国の「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」を導入し、多数の里山活動団体に活用していただいております。

ここ、南房総市では里山資源の活用として、花き栽培の温室に薪ストーブの利用を推奨され、市をあげて薪づくりにも取り組まれていると伺っており、里山資源の有効活用先進的な地域です。

そして、この地には、日本で唯一「料理の神様」が祭られている「高家神社（たかべじんじゃ）」がありますが、本日の午前中は「食」を中心テーマに分科会が行われたと伺っております。

午後も基調講演やお国じまん大会など盛りだくさんな内容ですが、どうぞ料理の神様に見守られながら、市民活動団体ならではの自由で忌憚のない議論を行ってください。

最後に本日、御来場の皆様のご健勝と、里山活動の一層の発展を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

(代読 次長 堀内延保)

第1分科会 里山～里海～ 私たちにできること

■コーディネーター 竹内聖一

■主催団体 NPO 法人たてやま・海辺の鑑定団
安房ふんころがし

■報 告

房総半島の南端にあたる南房総エリアは、三方は海に囲まれ、農林漁業や観光業に関わる方が多く「里山と里海」は、私たちの生活に欠かせない存在であり、後世に守り伝えなければいけない大切な資源（宝物）です。この分科会では、里山から里海までの地域の自然の大切さを伝えると共に、地域の問題・課題の一例を紹介、そのための自分たちの行動・アクションを事例として発表しました。また、そのためにみんなが出来ることを討議しました。

参加者はスタッフも含め約延べ人数 30 人。

事例発表は、前半に、「たてやま・海辺の鑑定団」が発表を行い、後半が「安房ふんころがし」が行いました。

たてやま・海辺の鑑定団は、南房総の海辺の様子を伝えるプレゼンテーションで「海辺の漂着物」を解説。ウミガメの頭骨、クジラの背骨の化石、大きな貝殻（ボウシュウボラ・サザエ・ヤツシロガイ）、ハリセンボンの骨格、ヤシノミ、タカラガイ類、海外からの漂着物などを解説しました。そこでは、南房総の海辺の楽しさと大切さ、そしてゴミ問題などの現状が伝わりました。

その後、スライドを活用し、たてやま・海辺の鑑定団の取り組みである、海辺のエコツーリズムについて、南房総の海辺の自然の映像と、活動の取り組みを紹介しました。

エコツーリズムとは、地域資源（自然・文化・歴史）の保全と活用を両立し、持続可能な観光のあり方を地域で作り上げる仕組みのこと。そこでは、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」を求め、環境を重視した生活が今求められる中、南房総の自然環境をどう活かし、どう守ってゆくのかが語られました。

多様な価値観の中で、従来型観光のひとつである「海水浴」は、年々減り続け右肩下がりの傾向を示しています。首都圏 3000 万人の方々のお近く近くの南房総エリアには、海も山も文化も歴史もあります。その自然環境は人の生き方に密接に結びついて、まさに里山と里海であり、その資源を活かした活動が求められていて、その事例を発表いたしました。

海辺の鑑定団では、南房総・館山沖ノ島を中心とした自然体験活動を行っています。沖ノ島をぐるっと巡る「沖ノ島無人島探検」、夏の沖ノ島の海を直接自分の目で見てみる「沖ノ島・サンゴに出会えるスノーケリング体験」、海の魚と知恵比べ「ちょい投げ釣り体験」、地元漁協と連携した取り組み「海藻収穫体験」、環境保全を直接行う「沖ノ島の海岸ゴミ調査」など、様々な取り組みの事例を発表しました。

一方首都圏から近いと言う理由などで、「大規模開発」の問題が直接降りかかっていることもお伝えしました。たとえば、森林を大きく切り開いた「埋め立て事業」、また、私達の生活にも関わる「ゴミ処理施設」の問題など、これらは、私達が自然環境に関心していることが、引き起こしている問題ともいえるかもしれません。



後半の安房ふんころがしは、主にゴミの減量「堆肥化」について報告しました。昨年から、南房総市の市民提案型まちづくり事業で活動しています。

はじめに、安房ふんころがしの昨年1年間の活動を紹介しました。夏休みに子どもたちが参加してペットボトルを使った堆肥づくりをしました。ペットボトルには地元で茂っている竹のチップをつめて使いました。冬場に竹を伐ってチップにする作業をしたり、落ち葉集めをしたり里山の循環もしています。身近にあるものでゴミになるはずだったものが堆肥になるということをお伝えしました。



その後、今年度の取り組みである「キエーロ」(木製生ゴミ処理機)の紹介をしました。

木の枠に透明の波板の屋根がついているだけなのに生ゴミを入れると分解が早く、臭くないという優れものです。会場に集まった方も興味を示されていました。

長生町では竹を使った様々な取り組みが行われているというご意見や、マンションなどの集合住宅の資源ゴミ置き場に一つあったらいいというご意見が出ました。

水分の多い生ゴミを焼却ゴミとして出すことは無駄なエネルギーを使うことになります。生ゴミを含め資源となる焼却ゴミが7割近い現状をはまだまだ改善できるはずです。

生ゴミの堆肥化や里山の循環は美しい海を守ることにもつながるのでしょう。

最後に、会場の方々も交え、意見交換を行いました。「自分たちに出来ること」「本当に大切なこと」などをテーマに情報交換の場ともなりました。「海のゴミはなぜ無くならないのか」「海辺の自然体験に参加してみる」「キエーロ(生ゴミ処理)を作ってみる」「ネットワーク・情報交換が大事」「大型施設(ゴミ処理場計画)がなくなったのでゴミ処理を考え直すチャンス」などの参加者から多くの声が出され、ここでの結論は出なかったものの活発な意見交換が行われました。



第2分科会 人から人へ～地産地消の食・郷土料理～

■コーディネーター 小西由希子、遠藤陽子、佐藤玲子

■主催団体 NPO 法人大山千枚田保存会

NPO 法人千葉自然学校

NPO 法人ちば環境情報センター

■報 告

海の幸・山の幸が豊かな南房総で、親から子へと受け継がれてきたふるさとの味を今後も伝えようとする取組と、地元食材を生かした南房総市の学校給食についても広く知っていただくことを目的に開催しました。参加者はスタッフを含め

17人。ほかに、書籍「南房総市日本一おいしいご飯給食」を頒布しました。

発表一人目は、NPO 法人大山千枚田保存会理事長の石田三示さん。「南房総に伝わる里山の食の魅力と現在の食」をテーマにお話いただきました。「農民と消費者をつないで農業を理解してもらい、国が農産物価格を補償する仕組みを消費者が後押しすることが必要だ。最近農家レストランをはじめたが、昔は食材を確保できる距離は半日以内で行ける範囲とされていた。私たちには、地元産のものを調理して次世代に伝えていく義務がある。NPO のレストランが繁盛しても地元の八百屋が潰れては意味がない。農家レストランは地域の文化を伝える物語がないとだめ」と話されました。

次に、ひだまりの郷の押元真理子さん、岡田春江さん、稲葉輝實さんから、ふだんは農・漁業にかかわりながら、地域の女性たちと行っている食農や海の体験活動についてお話いただきました。地元の食材を使って年間を通じて都市の人々や子育て世代と交流している「親子自然体験塾」（タケノコ堀り、田植え、さつまいも植え、ビーチコーミング、おはぎ作り、もちつき、味噌作りなど）や、漁業体験としてところてんや地元食材を使った昼食づくりなどについて紹介があり、今後も地元の人とふれあえる旅の観光メニューを増やしていきたいとのことでした。



分科会の様子



石田三示さん



押元真理子さん



岡田春江さん



稲葉輝實さん

最後に、元県生活改良普及員の古畑玲子さんから、食を活かした農漁村女性の支援についてお話いただきました。「戦後は食糧増産に力が入られたが、昭和40年代で米が余り始め、専作経営（同じ作物を多く作る）がはじまり、構造改善事業も進められるようになった。これまで

は、「自分で食べるものは自分で作る」のが当たり前で、今は何の種をまくとか、葬式は何をどれだけ作るとか、親が子に、姑が嫁に伝えてきたが、50年代ごろから食の伝承ができなくなってきた。自分の家で作ったもの食べるのは「ただ」でつまらないもの、貧しいことなのだという認識があったが、農村女性に「起業家促進」、「農業収入を得る女性を育てる」、「作ったものを加工して消費者に知らせる」よう働きかけてきた。「100円無人市」を「みっともない」という意見もあったが、小遣い(現金収入)が得られ自分の銀行口座が持てるようになったことに喜びを感じた女性たちが、漬物などの加工品を直売に出そうと意欲を持った。直売所の営業許可のとり方なども指導した。地元の人にとっては「こんなつまらないものをどうして喜んでくれるのか」という驚きがあったが、自分の暮らしに自信をもつことが必要。地域の産業を考えると、これからは、1・2・3次産業がそれぞれ互いを考えあって6次化をやることも大切である、とのお話しでした。



古畑玲子さん

いずれも豊かなふるさとの食を未来に受け継いでいこうとする確固とした信念を感じました。
《質疑応答》

①Q：大山千枚田保存会が活発に活動継続している理由は？

A：ここに来るまで5年間は無償でやってきた。事務局がしっかりし、どれだけ思いがあるかが大切。ボランティア活動では一線を越えられない。課題を追いかけお金をしていく。価値を伝えるものについては対価をとるという方針。現在の事業費は、年間8000万円、働く人に時給1000円を払っている。

②Q：行政との協働は？

A：市や県は先進的な提案にはブレーキをかけるが、(モデルを作りたいので)国のほうののってくる。どちらかという、市がこの活動を利用しているほうだと思う。

③Q：自分たちも今後活動を広げていきたいがアドバイスを

A：事業はタイミングが大切。隣町でうまくいったことをやっても無理。耕作放棄地の害獣対策は、猟友会に頼っているのはダメ。農家サイドで何とかしなければいけない。

《意見》

退職後移住して、染めや織りをやっているが、「ひだまりの郷」の仲間に加えてもらっている。農産物の素材を生かしたさまざまな調理方法をいろいろ教えていただいている。

★発表者プロフィール★

石田三示さん：鴨川市平塚在住 NPO 法人大山千枚田保存会理事長。棚田オーナー制度をはじめ、都市の人の農業体験・交流を進め、棚を再生させ、大山千枚田を南房総を代表とする観光地とした。現在、農家民泊や農家レストランを開設し地域活性化に活躍

押元真理子さん、岡田春江さん、稲葉輝實さん：南房総市和田町在住 農業・漁業の傍ら、地域の女性たちと「ひだまりの郷」を結成し、食農体験や海の体験を実施している

古畑玲子さん：館山市上真倉在住 長年、生活改良として南房総を中心に活躍。退職後も学校や地域で食育や地域活性等に活動。事例発表内容

第3分科会 南房総産 健康茶

■コーディネーター 堀内英哉

■主催団体 NPO 法人えふぶんのいち計画
南房総わすれられランド

■報 告

□里山シンポジウム分科会の内容

南房総市の中山間地域で栽培、採取された健康茶の試飲会を実施しました。



□私たちの活動の概要

南房総わすれられランドでは過疎高齢化の進む中山間地域への就農移住の受け皿作りとして健康茶の栽培と販売チャネル作りを進めています。「農業では食べていけない」というのが当地の常識ですが、若手の就農移住者の今後に期待し、里山の維持、コミュニティの存続を図る計画です。概要は次の通りです。

- 1 主な商品・・・健康茶、ハーブ、ドライベジタブル、苗等。
- 2 活動方針・・・IT活用による拡販、加工販売の6次産業化。
- 3 参加団体・・・南房総わすれられランド、田倉ファーム、大紺屋農園、ハーブちくら
- 4 移住支援・・・受け皿作りの一環として和田地区の廃屋を補修したシェアハウス作りも進めています。
- 5 環境問題・・・自然と隔離したライフスタイルの都市住民に自然と人の関係を見直す機会を提供したいと考えています。

シンポジウムでは議題は健康茶とハーブの一部商品の紹介のみとし、6次産業、シェアハウスの問題は省略しました。また、参加団体も健康茶の南房総わすれられランドおよびハーブのハーブちくらの2団体にしぼりました。

□シンポジウム報告

南房総わすれられランド、ハーブちくらのポスター、チラシを展示し、健康茶とハーブティーの試飲をしました。今回のシンポジウムでは講演形式ではなく試飲による交流拡大と活動の拡散を意図しました。会での交流の主な対象としては活動をともにするメンバーではなく、私たちの活動内容を知らない来場者となりました。

来場者は46名。内訳は外国人5名。市外からは11名。大会関係者は13名でした。

会関係以外の方が17名で予想より多い結果でした。その中で、東京で実施したマルシェのお客様が2名参加してくれました。

南房総わすれられランドでは将来、全国市場を視野にということで、その第1段階として東京でのマルシェを2015年度から3回開催してきました。今回の会の周知はホームページだけで行ったのですが、東京からの参加があったことで意を強くしました。

また、後日、私たちの圃場へ会で初めてお会いした方、3組が訪問してくれました。苗を寄贈

し情報交換をしました。予期しないことだったので、大事に交流を進めていきたいと思っています。

試飲は杜仲茶、ウコン茶、スイカズラ茶、ケツメイシ茶、大青葉茶、黒モジ茶、ホーリーバジル茶でした。成人病、風邪、便秘、癒し等に有効とされるものでした。試飲以外ではステビア、ブラックペパーミント、スペアミントの生葉を展示しました。この中では甘味料として有名なステビアに興味を持った方が多かったです。糖尿病対策として頼りにされているものです。

展示内容としては「薬事法に関わる問題点」、「世界各地の健康茶」の2点をパネルにしました。

薬事法は担当官庁が今年から消費者庁になったこともあり、監督方針がどうなるか。私たちの活動内容にも関係してくる問題点をパネルにしました。ただし、複雑な問題なので未だはっきりしない点が多いのが現状です。とくに、広告の表現に関しては私たちも問い合わせしており、現在、回答待ちの点があります。ただ、シンポジウムの参加者は消費者の立場の方が主だったので、このパネルはパスされる方が多かったです。

健康草は世界の各大陸で古来重用されているものが多くあります。インドのホーリーバジル、エジプトのイチジク等、人の暮らしに深くかかわり大切にされてきました。日本の健康草も同様です。しかも、風土に合っているので無肥料、無農薬で立派に育つものばかり。病院でも漢方が見直されている今、健康草も見直す時ではないか。そうした意見も数人からいただきました。



第4分科会 今ある豊かさを生かす！大人の体験型・美味しい遠足

■コーディネーター 遠藤勇

■主催団体 3.p.m.さんじ・アルル農園

■報告

3pm（さんじ）のオーナーでもあり、フードデザイナーの横田さんには、農薬、化学肥料を使わずに育った野菜の特徴を捨てることなく全て、そのままの自然の色がおいしいと「食」としてデザインしていただきました。



全て使い切る事は「里やま」「里うみ」といわれていた環境においても同様の事です。以前は、生活のなかで牛馬や鶏、豚などの家畜の排泄物を土に戻し肥料として使っていましたが、害虫や病気など衛生面を考えると全てを使い切る事はそれなりの労力を要します。労力を少なく経済性を高める為には化学肥料や農薬が欠かせなかったのです。・・・でも、農家の生活が豊かになったのでしょうか？

中山間地域など、地方の高齢化、過疎化が進み「里やま」と言われていた環境の抜け殻になっていると言っても過言ではありません。農薬や化学肥料によって大地が病んでいます。

○「里やま」と言われている人の手の加わった身近な自然、生活文化は「農」の営みからもたらされたものですか？

○「里やま」と言われている環境は存在していますか？

○「里やま」と言われている環境は何故荒廃してしまったのですか？「農」の営みが変わったのですか？「農」の営みが減少したからですか？

○「里やま」と言われている環境は私たちの生活にどうしても欠かせないものですか？

欠かせないものなら、「里やま」と言われている環境を意識して「農」の営みに取り組まなくてはなりません。

※アウトドアの雑誌を出版している内外出版さんから拠り所となる「わたしのふるさと化プロジェクト」の提案をしていただきました。今後少しずつ取り組んでいきます。

田畑で育った作物を全て無駄にしない、作物の忌避力を生かすように手助けをする。その為には身近な自然の相互関係を読みとることが大切なのではと思っています。

※あなたと、「里やま」の未来を考えると称して、書籍などからキーワードを見つけ物事を読み取る方法を酒井さんに話をさせていただきました。

※今後の取り組み 年間を通じてイベントなどを催し、大地で育つ作物の忌避力を生かす手助けをしていきます。身近な自然の相互関係を読み取り作物を育てます。作物や草花、樹木など、それに伴う大地を含めてデザインできればと取り組んでいきます。



第5分科会 安房拓心高校の取り組み・学校紹介

■コーディネーター 園芸部部长 安西政治

■主催団体 千葉県立安房拓心高等学校

■報 告

～ユリの2度切り栽培への挑戦～

「はじめに」

房総半島の南に位置する安房地域では、大都市に近く、また温暖な気候であることを生かし、花の栽培が盛んに行われています。特に切り花が多く栽培されており、温室でキク・カーネーション・そしてユリが栽培されています。



しかし、温室栽培では燃料費の高騰や切り花の需要が減っており、経済的に切り花生産が難しくなっています。そこで私たちは球根の購入費を減らし、少しでも経費削減ができるのではないかと考え昨年からユリの二度切り栽培の研究を始めました。

「研究の目的」

昨年の研究で私たちは、茎を長く残し、葉数を確保すると、二作目の花数、草丈が増加するという結果を出すことが出来ました。しかし、茎を長く残すと一作目を短く切ることになり、逆に一作目の商品価値が無くなり、実用的とは言えませんでした。そこで、今年は一作目も二作目も商品価値が高くなるように改善し、研究することにしました。



「改善点と目標」

昨年クリザール水の吸糖処理に結果が出なかった理由は、既定の濃度の3%が薄く、十分な量の糖分を与えられなかったと考え、①クリザールの濃度を増やし、糖が二作目の生育に影響を与えるか調査することにしました。また、昨年は低温要求を満たせず休眠打破が出来なかった鉢での栽培も、低温要求を満たせるように工夫し②鉢のユリを低温処理し、休眠打破させる。また、ホルモン剤を与え、ユリの生育への影響を調査するという目標を立てました。

「研究計画」

次のような栽培計画を立て、研究を行いました。

- | | |
|-------|---------------------|
| 9月 | 球根植え付け |
| 11月 | 一作目収穫（草丈、花数の調査） |
| 12～1月 | 吸水ピック・ホルモン処理（吸水量調査） |
| 5月 | 二作目収穫（草丈、花数の調査） |
| 6月 | データ整理、評価、まとめ |



「研究1」

今回は、昨年の研究で使用した「ハイドパーク」ではなく、同じLA系の「ロイヤルトリニテ

イ」を使用しました。9月17日に切り花温室の地床のベッドに植え付けました。まず、鍬の幅（約15cm）で、深さ20cmの穴を掘り、2列で、1mあたり16個の球根を置床します。これに軽く覆土しCDU化成肥料とアドマイヤー粒剤を散布し、埋め戻しました。

糖度は、既定の濃度に希釈したクリザール水に砂糖を混ぜることで変更し、試験区は、A区（無処理）、B区（3%）、C区（6%）、D区（9%）、E区（12%）としました。

調査は、一作目の蕾に色がついたら、草丈と花数を測定し茎を10cm残して収穫しました。その後、各試験区で決めた濃度のクリザール水を吸水ピックに入れ、吸収させました。クリザール水は、茎が枯れ吸水しなくなるまで減った量を観察しながら補給しました。また、二作目萌芽前には、CDU化成肥料を施し軽く中耕しました。二作目の収穫は5月からになりました。調査は一作目と同様に行いました。



「研究2」

研究2では、研究1と同様に1作目の茎を10cm残して収穫し、その後、一試験区4つの鉢に分け6試験区づくり、ホルモン剤を与えました。ホルモン剤はジベレリン、トマトトーン、ビーエー液剤は希釈し葉面散布、ルートン、ベアニンに直接薬剤を茎の切り口に塗りました。何回かホルモン処理をした後、1月7日から温室を変え冷たい空気にあたるようにし、低温要求を満たせるようにしました。

「結果1」

二作目の萌芽はE区が一番早く、その後は他の吸糖処理区も無処理区より早く萌芽しましたが、その後の生育では変化が見られず、収穫時の花数もすべての区で大きな差は見られませんでした。また、草丈は全ての区で一作目より二作目の方が長いという結果が出ました。今回二作目の草丈が長かったのは、前回の実験とは、施肥管理と条件が違っていたためであると考え、糖分は草丈と花数の増加には関係がないと結論しました。しかし、吸水ピックを利用した養分給与はまだ二作目の草丈、花数の増加への糸口となると考えました。

「結果2」

今回は四月に無事全ての鉢で萌芽しましたが、ホルモン処理したユリも全て花数、草丈共に大きな差が見られず、一作目より二作目の方が少ない結果になりました。ホルモン剤による生育、花数、草丈への変化が今回は見られませんでした。休眠打破ができたこと、また、ホルモン処理の回数が少なかったこと、濃度が既定の濃度でありユリに対して適切な濃度ではなかったことなどが考えられるので、実験方法、条件を変化させるとホルモン処理の効果が出る可能性があると考えました。

「終わりに」

今回の研究では、はっきりとした結果を出すことは出来ませんでした。しかし、研究の中で、また新たな可能性と課題が出てきました。今回結果が出なくても、研究を続けていくうちにユリの二度切り栽培技術を完成させ、多くの花農家さんに活用してもらえると私たちは信じています。これからも安房拓心高校園芸部は、日々の活動で真剣に農業について学んでいきます。

第6分科会 一年中桜の咲く里山づくり&南房総セラピー

■コーディネーター 笹子全宏、神保清司

■主催団体 安馬谷里山研究会、たのくろ里山保存会、大貫古道の会、NPO 法人千葉自然学校

■報告

里山の保全活動に取り組む4団体が、南房総で自然を生かした里山づくりを広く知ってもらうことを目的に開催しました。参加者はスタッフを含め40人位です。

発表一人目は、安馬谷里山研究会の笹子さん。「一年中桜の咲く里山づくり」をテーマにお話し下さいました。平成10年に中山間地開発事業として、総面積12ヘクタールの内、3.5ヘクタールの雑木林を切り拓き、桜、椿、ミモザアカシア等を植樹し、毎年2回の草刈、除間伐、苗木づくりの取り組みと、セラピーロードに認定された「安馬谷里山の道」を歩くハイキングが、平成14年から38回開催され、3回のJR主催の駅からハイキングを含めて、延2,000人の参加が報告されました。

次に、たのくろ里山保存会の活動内容を発表しました。活動場所の南房総市千倉町川戸地区は、千倉町の北西部に位置し、小高い山に囲まれた盆地状の土地に戸数86戸の高齢化、過疎化の進む集落を形成し、地域ぐるみで環境美化活動に努めています。

里山づくりについての合意形成とその内容についてですが、平成15年、活動を開始してから数年が経ったころですが、自分たちで地区のシンボルを造りだそうという話が沸いて、以前は、牛の放牧地として使用していた荒れ果てた山があり、山頂からの眺めが素晴らしかったこともあり、この山が旧千倉町所有地であることもあり、町と話合いが持たれ、こうした過程で、拠点となる山「おんだら山（俺たちの山という意味）」と愛称を決め、活動のウェイトを里山活動に置くようになりました。その後、地権者である旧千倉町（現南房総市）と里山活動協定を結び、県の認定を受けております。以降、おんだら山の草刈りなど地道な活動だけでなく、地区住民を巻き込んだ里山活動、都市農村交流活動を活発化させていくこととなります。

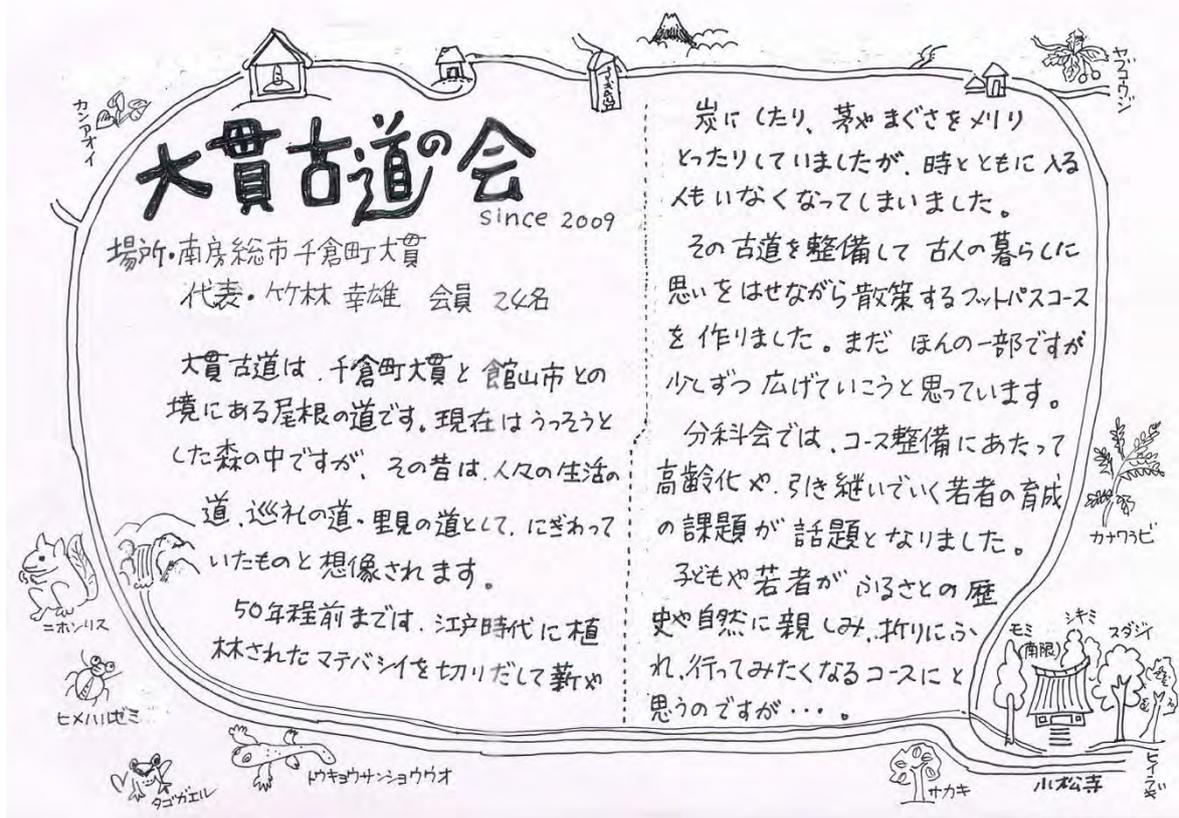
その具体的な活動は次のとおりです。

- ① 小学生卒業記念植樹 地域の小学校と連携し記念植樹や里山体験を行っております。
- ② 自然体験教室 わら細工・リースづくり他
- ③ 果樹類の栽培と販売 特にブルーベリーはアイスクリームやジャムに加工販売している。
- ④ 上総掘りによる井戸掘削

荒れた里山を復活させるには容易なことではないが、老若男女多様な人々の力で集落の活性化を目指し、定期的な保全活動を今後も進めていきたい。

《参考》

- ・会員 30名
- ・森林面積 2ヘクタール（斜面林）
- ・活動日 毎週水曜日 9時～15時
- ・作業 下刈り、除伐、果樹栽培、植樹、景観整備



最後に、安馬谷里山研究会、たのくる里山保存会、大貫古道の会の3団体の活動発表を受けてNPO千葉自然学校からは、南房総セラピーに関する活動報告を行いました。

各団体が保全する南房市内の豊かな里山里海を活用するために森林セラピー®やタラソセラピーなど心と体の癒しにつながるプログラムを総合的に取り入れて、それらを南房総セラピーと称して地域の魅力創出や普及に取り組んでいます。

森林セラピーは、医学的なエビデンス（証拠）に裏付けされた森林浴効果をいい、森林環境を利用して心身の健康維持・増進、疾病の予防を行うことを目指すものです。

具体的には、森林の地形を利用した歩行や運動、森林内レクリエーション、栄養・ライフスタイル指導などの方法によって、これらの目的を達成しようとするセラピーをいいます。南房総では森林散策はもちろんのこと、樹の間にハンモックを張って、鳥のさえずりや風の音に耳を傾けて木漏れ日を浴びながら寝転がりリラックスタイムを演出します。春はミツバチの羽音聞きながら菜の花畑に佇みます。夏は海に囲まれた南房総の地の利を活かして海水中でのアクアウォーキングなど行います。

このように健康×里山里海を意識したプログラムを開発し、南房総の豊かな里山里海に新たな付加価値を見出すのが南房総セラピーの目的です。



第7分科会 房州捕鯨の今と昔

■コーディネーター 北見和美

■主催団体 NPO 法人リチャースクールわくわく WADA

■報 告

南房総市和田町は、江戸時代初期に内房の勝山の地で始まったツチ鯨を対象とした捕鯨が、今でも続けられている。ツチ鯨は体長約10メートルの歯鯨で、夏の漁期中は多くの人々がその解体現場を見学し、鯨肉を食べに訪れます。



この分科会では、房州捕鯨の歴史と現状を、壮大な捕鯨の世界史の中に位置づけ、その特徴、地元の食文化等について概要を説明した。さらに17年間実施してきている小学生の解体見学の様子を紹介し、房州捕鯨の今を説明し、最後に質疑の時間を設けた。出席者は、約30名。

捕鯨基地のある和田浦は、畑などの農地がほとんどなく典型的な漁村風景となっていて、海は浅瀬が少なく、すぐ深くなる。

世界の鯨の種類は、83～84種類と言われている。ここで水揚げされるツチ鯨は、IWCの規制外の鯨種であるが、国から捕獲枠が割り当てられていて、和田26、石巻26、網走4、函館10、計66頭となっている。

ツチ鯨は、歯鯨の一種で体長10メートル前後、体重10～15トン程度。歯鯨ではマッコウクジラに次いで大きい鯨である。房州では400年前からこの鯨を獲って食べていた。毎年夏になると房州沖の水深千から三千メートルの海域に回遊してくる。小型捕鯨船（船長約20メートル、トン数27トン、乗組員6人）でツチ鯨を獲る。ツチ鯨は、敏感で船が近づくとすぐに潜ってしまう。1回潜ると40～60分出てこない。だから発砲のチャンスが少なく獲りにくい鯨だ。基本的に日帰りの操業である。



捕獲した鯨は、調査員による解体開始前の生物調査を行う。解体は、大包丁で鯨の皮を剥ぐ作業から始まる。ここでは今日捕獲の鯨を翌朝に解体する。柔らかい肉を食べたいから。肉は8割がたタレに利用するが、皮は食べない。東北・北陸の人は塩蔵皮で鯨汁をつくる。

大包丁で肉の塊を落としその後裁割する。肉の一部は当日加工屋さんや魚屋さんに販売する。近所の人々も買いに来る。房州の伝統食「鯨のたれ」はクジラの肉を8mmくらいにスライスして醤油や塩で味付けしたものを天日で干す。それをあぶって食べる。

房州捕鯨成立の時代背景としては、まず16世紀後半、関西（紀州）漁民が魚を求めて房州に移住、江戸幕府の成立、関東に巨大な都市江戸（東京）が出現、食べ物が足りないため下り物で対応、魚を多食する江戸の魚食文化の成立、内房で八手網が、外房で地曳網が発達、内房の鮮魚が船で江戸に運ばれる、外房の九十九里浜にて鰯の地曳網漁業が成立、17世紀初頭に内房の勝

山に槌鯨を対象とした捕鯨が成立。

欧州では最初に捕鯨を始めたのはバスク人であり、10世紀頃から彼らはビスケー湾の背美鯨の捕獲を始めた。バスク人の捕鯨も日本人のそれも背美鯨から始まった（大量の油がとれ、死んでも沈まない鯨）。欧米人は、商品作物たる鯨油を求めた。日本人は、鎖国政策の影響か獲った鯨を余すところなく利用した。江戸時代の捕鯨のメッカは長崎だった。

平成11年から地元の小学5年生を対象に解体見学を続けている。

(目的)

- ・地域の産業・仕事を児童に体感させる。

(問題点と対応)

- ・血まみれの美しくない現場である。
- ・現場見学後の朝食・・・場所を変える。
- ・早朝の見学、かつ予定は前日に決まる・・・学校・保護者の全面的な協力、関係者（鯨食文化の会・漁協）の全面的協力。



(子供たちの反応)

- ・現物（鯨体）をさわってみる・・・プニユプニユしている。
- ・鯨体に包丁を入れると、どっと血が噴き出る・・・悲鳴が上がり、子供たちは手で顔を覆う。包丁さばきに関心。
- ・朝食は場所を変えて、鯨カツを食べる・・・解体はちょっと気持ち悪いと言う児童もいたが、概ね喜んで食べていた。

※朝食後に和田の捕鯨の現況と歴史を学ぶ。冬場には、小学校で鯨料理教室を行っている。

(児童たちはここで何を見、感じたか！)

- ・鯨という生き物の現物（死体ではあるが）
- ・鯨の解体の行われる海辺の風景・吹く風・匂い
- ・人々が汗を流して働く風景、熟練の技術
- ・捕獲・解体される鯨と、食べ物としての鯨
- ・座学で和田浦の捕鯨の現状と歴史の知識を学ぶ。
・・・多様な要素を持った場である。



説明の後の主な質疑について

- ・解体の開始時刻について・・・

柔らかい肉を利用するため捕獲後約18時間置くことから早朝4時～5時頃が多い。

- ・他の沿岸捕鯨基地の現状は・・・

全国4か所あるが、和歌山県太地町はゴンドウ鯨を獲っている。

- ・環境保護団体等による捕鯨反対行動はあるか・・・

過去には事例があったが、現在は特にない。

最後に、いわゆる捕鯨問題については、単純に沿岸国の水産資源の利用であるというスタンスで操業しており、伝統的な食文化の継承と地域の産業として持続してきているという現実を伝えた。

第8分科会 白浜里見古道再生と、はぐくみ活動

■コーディネーター 栗原猛

■主催団体 白浜地域づくり協議会『きらり』
じょうやまの会

■報 告

シンポジウム前日の5月14日(土)に、きらりメンバー4名で分科会の会場となる教室を掃除して、展示パネルやパソコン、プロジェクターを搬入して発表の準備をした。

今回初めて使用するプロジェクターは、実際にパワーポイントで作ったデータを教室に設置してあるスクリーンに映写して、置く位置を決めた。そのままでは部屋が明るすぎたので、カーテンと展示パネルで窓を塞いで調整した。展示パネルは、総会等のために活動部会ごとに沢山作ってあったので、全体会場の体育館と分科会会場の教室両方に設置したが、これらは他団体のパネルに引けを取らない出来と自負している。



シンポジウム当日は8時半から準備を始め、30分ほどで椅子や机も並べ終え、プロジェクターの映写テストもOKとなり、分科会での発表準備が整った。本番スタート時刻の10時まで、全体会場の体育館や他団体の分科会会場の様子を見て回り、気分を落ち着かせた。



いよいよ定刻の10時になると、教室には十数人の方が着席して発表を待っていた。お客様を前にしてやや緊張したが、予行練習の通りパワーポイントの資料に沿って説明をしていった。

まずは「きらり」設立の趣旨と経緯を簡単に述べ、更に写真を使って各活動グループごとの説明に入った。花の会、美化活動、農業体験、レク部会、防災防犯部会、おたから部会、はぐくみ活動と順に紹介して、メインの里山活用の中心となる「じょうやまの会」について詳しい説明を行った。



分科会のテーマである「白浜里見古道再生とはぐくみ活動」について、多くの写真を見てもらいながら草刈りや木障刈り、案内板の設置、千葉市や地元の小学生・一般ツアー客のガイドなど、多岐にわたる活動の様子を詳しく述べた。

里見古道の新ルート開発やそれに伴う案内看板の製作と設置について、来場者の関心が特に高く意見や質問が相次いだ。東京や横浜から参加した熱心な方もいて、南房総の里山が持つ魅力について逆に教わり再認識させられる点もあった。それは南房総と首都圏の時間・距離の近さだったり、海と山がすぐ近くにある驚きだとか、長くこちらに住んでいると当たり前になっていることが、実はとても貴重なことだと気がつかされた。



最後に4月の「きらり」定期総会の記念写真を紹介し、30分足らずの発表を無事に終えることができた。

第9分科会 南房総ロマネスク～紙芝居～

■コーディネーター 鈴木勇太郎

■主催団体 NPO 法人富浦エコミューゼ研究会

■報 告

NPO富浦エコミューゼ研究会では、この地域に残る民話や昔話を紙芝居により紹介し、この地域の大切な民俗資源を伝え、再認識してもらい、ここに暮らす地域の人々にふるさとを思う気持ちを醸成し、里山をはじめ海辺や町の小路を歩くときに、それぞれの地域にある幻想的な魅力・ロマネスクを感じてもらうことを目的に分科会を開催しました。



里山里海の魅力は、その風景や人々の暮らしの中にあるのではないのでしょうか。里山の草花や果実、トンボや蝶々、小川の流れ、田んぼや畑。海辺では砂浜に寄せるさざ波や小さな貝殻、潮だまりの中のカニやヤドカリ、港につながる小舟など、ふるさとの風景や暮らしが私たちの心を和ませ、癒してくれるのではないのでしょうか。

そして、ふるさとには、目に見たり、手で触れたりするものばかりではなく、昔から里山里海の暮らしや文化の中で培われてきた、もう一つの世界、現実の世界を飛び越えた幻想的な世界があります。それが先人から現代に伝えられてきた「民話」です。

昔の人々が語り継いできた里山里海ロマネスク。民話の世界では自由に話の中を飛び回れることもできたり、すぐれた偉人の仲間入りをすることもできます。決して子ども達だけの世界ではなく、大人もファンタジーの世界に足を踏み込むこともできます。むしろ、歳を重ねた大人だからこそ、日々の現実とは別にもう一つの世界を感じる事が、心を豊かにさせてくれるのではないのでしょうか。

里山里海が持つ豊かな世界を、次世代につないでいくことの大切さ、必要性を私たちのNPOは強く感じています。民話を保存し、次世代に伝承していくために行っている活動の一つが「紙芝居」の上演です。



昔は、囲炉裏端や布団の中で民話を語ってもらっていたと思いますが、今は、そうした環境をなかなか作ることができません。そうなので紙芝居という形にして、様々な場所で、いろいろな方が、いつでも話のできる環境づくりをしました。

子ども達には1枚の絵からイメージーションを広げてもらい、民話の世界の中で自由に想像力を高めてもらいます。高齢者の皆さんには、会話を弾ませるきっかけを作ってもらいます。また、地域外からの来訪者の方には、この地域に伝わる民俗文化を楽しく、わかりやすく学んでもらいます。

分科会では、これまで作成してきた紙芝居全作を用意しました。私たちのNPOは名前のお通り富浦地区を拠点に活動していますので、富浦地区に残る愉快的な民話や信仰に基づいたお話、特に大房岬に関わる民話や里見氏にまつわる作品が多くなっています。また、平成26年度、27年度にかけて、南房総市の助成事業「地域力を育むモデル事業」を活用し作成した富山、三芳、白浜、和田地区の作品も上演しました。本年度は、千倉と丸山地区の民話も紙芝居化しています。

スタート時には少なかった参加者も少しずつ集まってこられ、教室に車座になり紙芝居を聞き入ってもらいます。押し付けではなく、囲炉裏端で静かに語るおばあちゃんのように、NPOのメンバーが、紙芝居を語ります。

参加者の目と耳は紙芝居と語り部に集中し、やがて上半身が前のめりになっていきます。頬を緩める人、小さくうなずいている人、それぞれの人たちに様々な反応がおきています。きっと民話の世界に入り込んでくれたのではないかと感じさせてくれます。

上演が終わると、参加者の方から質問や自分たちの経験などの話があり、また、新しい発見などができました。作品を聞いた方々が、その民話の世界を感じてもらうことも大切なのですが、それをきっかけに、参加者自身が暮らす地域の民話や昔話を思い起こしてもらうこと、つまり、地域の魅力を再発見してもらうことがとても大切なことだと考えています。

今回のシンポジウムの「たくさんの土地の素晴らしさを発見・発掘し、南房総の新たな魅力と誇りにしていきたい」というテーマにおいては、南房総に残る民話を参加者の方々に伝えるとともに、参加者の方それぞれに地域を思う気持ちを呼び起こせたのではないかと感じています。

今回、上演した作品は私たちNPOのガイド事業で活用しているほかに、地域の皆さんに貸し出しもしています。富山地区のお寺様では法要で、檀家の皆さんに「勝善寺の飛び石」を上演してもらいました。和田地区では複数の地域活動団体が「はまぼうの謎（子の姫のお話）」を、地域の皆さんや子ども達に伝えてくださっています。市内いくつかの小学校でも民話を題材にした学習を取り入れてくださっています。

私たちNPOだけでは、この伝承活動には限界があります。こうして、様々な方々のご協力をいただき、里山里海に残る魅力を伝え、多くの人々の心の中に残していくことができると願っています。

これからも「南房総ロマネスク」広げていきます。



日常の紙芝居活動（右：ガイド事業での活用、左：道の駅での紙芝居上演会）

分科会 台湾の里山事情

■コーディネーター： いちはら里山クラブ 風間俊雄

■主催団体：台湾国立高雄師範大学 劉 淑恵 副教授 他4名

前段：2012年から縁あって台湾の国立高雄師範大学と小さな国際交流の場が出来た。

第11回目里山シンポジウム in 君津の全体会から、12回里山シンポジウム in 山武と2年連続して台湾から各回ともに数名の皆さんが来場して（最近の台湾の里山事情）の報告をしていただいた。今回の南房総地区の主題が（南房総お国じまん）とのことで、今回台湾高雄地区のお国じまを主題に報告をしていただいた。台湾もCOP10以降、里山（浅山）保全を何とかしたいとの機運が高まってきている。

そもそも台湾というお国が現在どのように形成されているかということ、多民族により構成された多民族国家であり、もともと生活していた民族 先住民（原住民）現在16民族が正式登録、本省人（副県系・客家系）、外省人（戦後本国から来た人）等が微妙な関係を保ちつつ、独自の文化と伝統を今もって受け継いでいる。我々は台湾といえば農業立国と考えがちであるが、近年ではITを含む工業立国に様変わりしている。

今回、来日した 劉 淑恵 副教授は台湾の地理学会の重鎮でもあり、自著に「看見 台湾里山」という著書を刊行している。また台湾の農業発展歷程期として、史前期を渾沌期、日治時代を黄金期、二次戦争時期を破壊期、戦後を回復期～停滞期、1986年以降を農業現代化時期、2002年以降をWTO適応期と称している。

報告者：鄭 峰茂（劉 淑恵 副教授のもとでドクターコース選択者）

タイトル：台湾無形文化遺産・東港「乙未正科」迎王平安祭

報告概要：300年の歴史を持つ屏東県東港鎮の「東隆宮」は、明時代から清時代にかけて移住した漁民たち（客家族？）によって建立され、温王爺を主神として祀っています。言い伝えによれば、温王爺は唐時代初期に功績を立てた武将で、後に海の神や疫病を鎮める神として民間信仰の対象となりました。「東隆宮」では温王爺が三年に一度戻ってくるという伝説から、三年ごとに「迎王平安祭」が盛大に行われています。台湾でも最大規模の祭であり、8日間も続き、最終日には王船といわれる数百万円もかけて作られた荘厳な船に火が投げられます。



東隆宮



迎王平安祭



荘厳な船に火が投げられます

報告者：孔 賢傑（劉 淑恵 副教授のもとでドクターコース選択者）

タイトル：カナカナブ族の「米貢祭」

報告概要：カナカナブ族（先住民族）は台湾の最高峰・玉山（新高山）の南麓一帯に暮らす、人口わずか500人ほどの少数民族です。「米貢祭」は豊作を祈る祭りで、カナカナブ族にとって最も重要な伝統行事であり、かつては一年間に9種の祭典がありました。現在は毎年10月に2日間で行われています。カナカナブ族は米貢祭をはじめとする伝統文化の復興に励んできた努力が実り、2014年6月、台湾政府から16番目の固有の少数民族として正式認定を勝ち取りました。



報告者：陳 雅女文（筑波大学留学時に工学博士号取得（日本にて活躍中）防災専門）

タイトル：里山と防災（祭り）

報告概要：地域を形成する為には、景観十年、風景百年、風土千年というように長い年月が必要となる。その地域の特性を生かし、地域に根差し、その風土と融和したライフスタイルが必要と考える。（祭り）、実は防災訓練？！と位置づけ、小学校の行事、親子キャンプ、炊き出し、また地域のお祭り等を年一度の最大イベントと称し、参加者輸送訓練を兼ねる。非日常的な体験が必要であり、広範かつ継続的な取り組みを推進する。

報告者：劉 淑恵（台湾国立高雄師範大学地理系副教授）

タイトル：台湾の里山の現況

報告概要：台湾の基本的問題として 食品の安全、衣料品の安全、住宅の安全、行動の安全が懸念される。食べても安全なのか？（問題食品が人体に与える影響が心配である）

今までの政権（国民党支配）が1月16日総統選挙により、民進党政権が発足し、これからの諸問題がどう移行するか？注目したい。台湾の勝利か？（5月20日から本番だ）



（上記）日本語訳は（NPO 法人ちば環境情報センター） 田原真司氏にお世話になりました。

1

里山の恵みと食の楽しさ

—14ひきのあさごはん(いわむらかずお作、童心社)

いわむらかずお(岩村和朗)さんは、日本の里山と、のどかなその美しい暮らしを描いている作家です。今日は、たくさんの力作の中からまず「14ひきのあさごはん」をひもといてみたいとおもいます。

個食がひろがっている日本ですが、14ひきの子どもねずみたちは朝起き、みずからいっぱい野いちごをつんできて、それをお母さんは、手作り心のこもった朝ご飯にする。みんなでご飯を食べながら今日一日をどうしようか、みんなで一日の見通しを話し合いながら、こうして家族が、みんながつながり食の文化を楽しみ合う。このような家族のなかの里山の食の文化が新しい日本のライフスタイルの中心に据えられていたのではないかな。

里山の食の文化の見直しに思いをはせながら、14ひきのねずみたちシリーズには、お月見の話「14ひきのおつきみ」もあります。

なんと神々しい美しいお月さんが東の山の端からあがってくるのでしょうか。ねずみの子どもたちは、お父さんたちがつくってくれた木のデッキから、あがってくるお月さんの美しさに心が奪われながら、そして祈りを込めておいしいお団子を食べ、大きな自然のなかに溶け込みながら、自分たちの小さな住まいと地域のいのちがつながっている。午前中の分科会でも、全てが山とつながっているという話がありましたが、日本の里山のくらしの日常のなかには、人間と自然が共に生きていると、おのずから、内からにじむように実感できる。ほんまの幸せってなんやねん！ということ、この里山の14ひきのねずみのくらしのシリーズは、私たちに語りかけてくれているのではなかろうかとおもいます。



2

自然の恵みと共に暮らす

—庭をつくらう(ゲルダ・ミュラー作、ふしみみさを訳、あすなろ書房)

いま一冊、ドイツの絵本、「自然の恵みと共に暮らす」にわけいて見たいとおもいます。里山里海についてはむしろ皆さんに学びたいのですが、ぼくはまちづくりの専門でありまして、人工的なコンクリートやアスファルトや鉄のまちをつくってしまったのを、近代社会の反省とし、都市にも、自然が日常生活につながり息づく、子どもが命あるものにじかにふれることを喜びとする。自然を慈しみ育てるのは煩わしさもあるけれども、それを楽しんでしまおう。里山や里海の文化をまちの文化と掛け合わせることを「里まち」とよんでおります。

これは里まちのお話の絵本です。あるまちの古びた家に引っ越してきた家族、子どもたちはここにジャガイモを植えたり、花を育てたりしています。そうすると「お父さん、プランニングしよう、計画しよう」と言います。日本の家庭の日常用語で、計画という言葉ほとんど使いませんが、ドイツでは計画的に庭を造ろうと、父さんが図面を書き、子どもたちは、喜々としながら自分の目指す庭が実現していくことを思い浮かべながら、お父さんと堅くなった庭を耕し、そして虫に食われ死にそうになったサクラの木を、痛かったでしょうと、手を入れよみがえらせてあげる。

ある日、家の前の古びたアパートからチューリップの花が下ろされてきました。なんやなんやと子どもたちがこの花に誘われて、その三階のバルコニーに行ってみますと、なんとそこには、車いすの男の子が、健康のためにクレソンを育てていました。そしてやって来た子どもたちに、ようきたなとその育て方を教えてあげるのです。日本ではまだまだ障がい者のために支援しようといった状況が広がっていますが、むしろ障がいを持つ人が教える、またそのような人から学ぶ、この水平的な関係で季節が進んでいくのです。

まちのなかでも子どもたちは、季節の流れのなかで木々や花を遊びの小道具にし、いろいろな遊びや



おもちゃも自分たちでつくっていく。

そして夏休み、子どもたちが旅したとき、車いすの男の子と手紙のやり取りをする。自然を通じて子どものコミュニケーションがつむぎ出されていくではありませんか。都市では花に寄ると虫にさされるからよしなさいと、若いお母さんがよく言っています。しかし、ここでは虫や毛虫やいろんな煩わしいこと、ちょっとしたケガにも、自分で経験を実感しながら責任をもって、あるべき自然とのかかわりに実感を持って、幼い子どもの時から日常的に体験を積み重ねていくのです。

里山里海のことをまちの中に浸透させていく。これが里山里海を育てておられる千葉の皆さんにも期待されていることでもあります。里山里海をまちのなかで体験できるような視野の広がりや都市の子どもたちにも届く、私はそのように念じています。

幼い子どもが、秋の暮れに、野鳥が庭先で死を迎えている様子を見て、生と死の間の悲しさや、そして死の向こうにあるものを想像する。その想像力によって命あるものの生きとし生けるもののつながりを実感することができる。そして日々の遊びを通して子どもたちの心や身が育っていく、そんな場を私たちは目指していきたいとおもいます。里山里海に加えて里まちの視点、これは新しい時代の千葉里山シンポジウムの次なる課題ではないかをご提案申し上げながら、現実の物語のなかに分け入ってみたいと思います。



3 干潟の魅力のタンケン・ハッケン・ホットケン -「こんな三番瀬にしたいな」ワークショップ(千葉県船橋市)

ご承知のように、東京湾には三番瀬というかけがえない陸と海の間をやわらかい干潟の世界、ある日、行政により埋め立てられてしまうという危機的な状況が起きました。この干潟の持っているぬめぬめどろどろの世界は人間の生きるうえで大事な感性をきたえてくれる場所ではないか。次世代にこのかけがえない里海としての干潟をどのように継承するか。言葉で、行政のやることに抵抗や反対するだけではあかん。なぜ干潟を残すのか。生物の多様性や子どもの感受性教育のため、市民たちは三番瀬を守る会を立ち上げました。私は千葉大にいるときこの活動に参加させ



て頂くことができ、あるとき、干潟で「タンケン・ハッケン・ホットケン」を企画しました。

この日は三番瀬で、多くの子どもの感動がみずみずしくこの干潟に広がり、また子どもの中にも広がっていきます。この感動を一瞬で逃がしてはあかん。午後からは小グループに分かれてのワークショップ。白いシートの上に、こんな三番瀬になったらいいなと、布絵づくりをやりました。でも子どもたちに大人のプログラムを押しつけたらあかん。一人ひとりの生きるリズムを大事にしようね。そういうことで、みんな最初はのんびりでしたが、やがて一人ひとりが自分の気持ちの中にもやりたい意欲が出てきて、そしてみんなのおもいが全体の行動の中にもぎとに映し出されてくるではありませんか。表現力が混ざり合い、小一時間のうちにビジュアルに「こんな三番瀬になったらいいな」とのおもいがわいてきたのです。

小学校3年の女の子が発表を口頭でおこないます。3年生とはおもえないほどしっかりし、周りの人が、やいやいと拍手し、いっそう彼女の表現の内容が高まっていきます。

段階的発達という教育の発想を超えて、生きた自然を体験する感動と人生の目指す方向感が一挙に噴出していくではございませんか。

また別のグループでは海の日という昼間の三番瀬の風景を表に画きながら、シートを裏返すと夜の風景、夜空に野鳥もいて、人間のカップルも歩いている、そんな風景も画きました。自然の生態系と人間の生態系が共存するような里まちとしての三番瀬にしていこうではないか。

JR 船橋駅を降りて排ガスをタップリ吸い込んで三番瀬の浜辺に行くとき。その場所に車いすの人もアクセスできるバリアフリー空間をこしらえてみよう。おでんのようにおいしい人間のコミュニティーを浜辺につくろうではありませんか。人生の細部に命が満ちあふれていく、自然のなかの人間の心には、外なる自然と内なる自然に表現力という人づくりの命が潜んでいるや。こうして三番瀬のワークショップに里海と里まちの心がみんなでも共有され、夕日が落ちる人々の心の中は一回きりのイベントではなく、里海、里まちのおもいが持続的になっていくのであります。

別の日には、千葉大学の学生が三番瀬でゴミを拾うプログラムがありました。ただゴミを拾うだけでは環境が良くならない。ゴミをアート化しよう。環境を良くするための表現活動もしていく、そんなこともおこなわれました。



この、タンケン・ハッケン・ホットケンが意味することは、体験が呼び覚ます感動を表現し、表現は伝達され参加できなかった人々に、自然と生きることの重要さが切々と多様に広がって行く。世論の高まりによって時をかけて、里山里海を回復することができるのではなかろうかと思うのであります。

4 住民が生活学芸員となって里山案内 —村丸ごと生活博物館(熊本県水俣市頭石村)

さて住民がみずからキュレーター（学芸員）となって、村を博物館とみなす。これを試みているのは水俣市であります。ご承知のように1957年にあの忌まわしい水俣病が発見され、それから復興への葛藤を50年、60年かけておこない、日本でも最も美しい山と海を持つのは水俣ではないか、熊本大学におりまして、そのように感じていました。時をかけて全国からたくさんの人の支援を、風の人・土の人が混ざり合いながら、環境共生都市づくりに至っているのであります。2001年水俣市は、元気村づくり条例のなかに「村まるごと生活博物館」を規定しました。例えば中山間地の頭石（かぐめいし）地区に行ってみましょう。

頭石の小さな山里には、この条例に基づく環境協定が結ばれており、みんなで古代からの小さな自然たちを守るとともに、人間のライフスタイルを変えていく事への方向感覚、そしてやってくる観光客に自分たちの暮らしの風景をお見せし、それを説明する学芸員は、住民自ら手を上げたのです。

緑の木々を剪定管理するおじさんの隣には、石垣の積み方とその多様性の世界。手前の小さな自然と向こうの大きな自然、そして神の国に一番近い入り口の林業が再び元気になっていくことの説明。足元には石段があって、このように水辺に向かって、水を生活の重要な資源とし、このように現代的な水道にたよる前の暮らしのなかに「水の文化」があった。その一部を今でも活用している。里山の暮らしの宝は、民俗的な山神さんの物語とともに、外からの旅人に新鮮な人々の暮らし方や生き方に関する触発を与えてくれるのであります。

全てを食べ尽くす。柿を干し柿にするためにむいた皮も、干して肥料にする。そして柿の実はたっぷり太陽を浴びて、都市の人々の胃袋を満たしてくれる。こうして生活そのもの博物館を案





内して頂きながら、山の緑も十分に呼吸しながらおいしい山菜料理や有機的な野菜料理を満喫できる。自然とともに生きる食生活や山里の魅力は賞賛の対象であります。

5 中山間地の危機を新聞づくりでのりこえる —多世代交流のまちの縁側づくり(長野市信里地区)

私たちは、名古屋で「NPO法人まちの縁側育み隊」の活動をやってきました。まちのなかに多様な居場所の縁側をゆるやか人のつながりにしていく。この私たちの名古屋でのつたない経験を、里山や里海にも伝えたいと、「タンケン・ハッケン・ホットケン」の旅は長野市へと続いていきました。

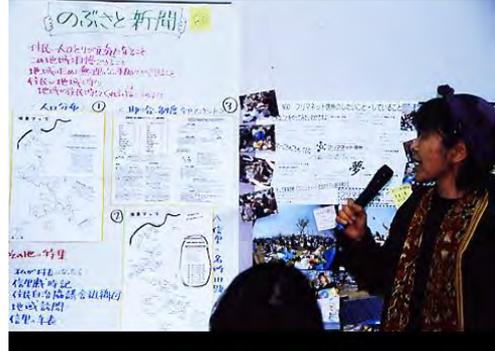
長野市のある地域では、ある日、病院からの帰りがけのおばあさんが、家の道ばたでうずくまっていた。これは大変と、その家では、翌日から庭先に椅子と机を出して、病院帰りの方、買い物帰りの方に、どうぞ腰掛けてお休み下さい。これは「いっぷくベンチ」と呼ばれますが、一人からはじまったまちの縁側ではありませんか。

ある民家を改装したデイサービスの所には、このいっぷくベンチを目印に高校生が学校帰りにやって来て、お年寄りの居場所を訪れる。高齢者と若者の交流が自然発生的に生じる、これもまたまちの縁側ではありませんか。長野市は39万人の大きな都市ですが、また多くの中間山地、里山もたっぷりあります。私たちは、その一つ信里を訪ねてみました。この里山には、東京からあるご婦人が、空き農家を活用しながら地域の女性たちとワタを栽培して、綿の文化を起こそうと活動しておられました。突然、この里山で二人の仲間を失うという危機的状況に遭遇したのです。この里山の大きな危機に、よそからやって来た風の人にもかかわらず、地域の土の人に呼びかけて地域のタンケン・ハッケン



ン・ホットケンで里山を伝えていこう。そして、これを一回きりのイベントではなく、むしろ持続的縁側活動としていくために「のぶさと新聞」づくりを呼びかけました。でもすぐにまじめな編集の会議ができるわけではありません。メロドラマ映画をみながら、一杯飲みながら、お年寄りと若者とが和気あいあいと集会をすることからはじめます。

里山の危機的状況を、自分たちの力で乗り越えていくためには、まず人と人とのつながりが必要であります。また、自分の地域の文化や誇りをあらためて編集し、発信し伝えていくためには、住民一人ひとりが誇りをもって、お互い守り合い信じ合い、そういう関係づくりをやっていくのです。新聞づくりというやり方で、里山に、まちの縁側づくりが広がっていく。思いがけないいろいろな出来事により生まれた自由な発想が、私たちにになにか重要なことを伝えてくれているように思うわけでございます。



6 風の人と土の人の交ざり合いによる 地域文化の創造 —地域のタカラさがしから絵金祭り、冬の夏祭りへ (高知県香南市赤岡町)

そして次はびゅーと飛行機に乗って高知県に行きましょう。高知では里山の文化と発想とをまちに活かすことを、人口3,600人の小さなまちの香南市赤岡町へ、まちのタンケン・ハッケン・ホトケンをやるとういうことでいきました。

人は減っていくは、高齢化が広がって商店街はあがったりやわ、もうあかんというときに、このまちづくりの支援にかかわることになりました。頻りに暴風雨が吹くこの地方の家々を守る白壁と水切り瓦の建築的な美しさに、ぼくは驚きをおぼえました。地域の誇りでもあるんやろうとおもいます。これは、ここにしかない宝物やと、風の人が言いました。風の人と土の人との混ざり合いの一つの重要なところは、自分の地域に住んでいる人はその宝物に気が付かない。よそからやってくる風の人から、あらためて土の人がそれに気づくのであります。

交流の効果の一端でありますけど、土の人が育んできた昔の文化といえば、このまちには、なんと江戸時代の浮世絵師の弘瀬金蔵の歌舞伎絵の原画が隠されておりました。この原画を、ある時から、夏の夜にはまちの明かりを消し、軒先にろうそくをおいて、おどろおどろしい歌舞伎絵



を楽しむ祭りをはじめました。オールジャパン級の宝物の発見だけではありません。時代の流れのなかで銭湯「旭湯」が廃業に追い込まれてしまいました。でもまちづくりの輪は生かされていきました。みんな夜な夜な銭湯の脱衣所に集まってまちづくりの将来について、大人目線だけで語るだけではありません。子どもの視点に立って地域の未来像を考えてみよう。考えるだけでなくアクション、活動をおこして行こう。表通りだけではなく、裏通りも、子どもたちの思いがけない宝物があり、感動を呼び起こし、深まっていたのです。

感動を逃がさないようにと、このときは、カルタづくりをおこないました。この日の子どもたちのつぶやきをすべてカルタにしていきました。こうして参加できなかった子どもたちにもこの日の宝物が浸透していくのです。時をかけて、自分の地域が好きになるプロセスが、じつは大事なことであります。

中心商店街もあかんと思ってきた人たちも、まだまだ行ける。茶飲み話も、道にコタツを出してやる。地域の新しい表現の世界が、効率やスピードが地域の発展としていた現代社会の価値観とは真逆に、ゆったりとしたまちづくりの発想が、里山里海の発想とつながって行くではございませんか。

スイトンを食べる時には正装せんとあかんと防空頭巾をかぶった国防婦人のおばあちゃんが、その姿を見ていたみんなに、パロディーやパロディーやと笑い飛ばした瞬間、こんどはメロディーが流れてくるではありませんか。このように自由奔放な発想と予期しえない行動の世界が広がっていくのであります。お年寄りのパロディーとメロディー、伝統的な文化と若者たちの新しい文化とが融合するのであります。地域の人々の自分たちでつくる祭りは、プログラムが毎年変わります。

路上で嫁を紹介する。これはお嫁さんがやって来たならみんなに紹介するという地域の伝統を現代にアレンジした姿であります。米蔵を活用し、コンサートの会場にもしました。やがてさらに絵金ミュージアムにもなりました。



こうして地域の宝物を活かし、いかなる地域を子どもの次世代に継承していくのか。閉ざされていた地域の人が多様な姿で会合し、お遍路さんや若い学生たちの参加といった風の人との交流。風の人、土の人の出会いにより新しい混ざり合いと予期し得ない行動が、赤間の再生におもむいていくのではありませんか。

風の人と土の人の役割を解説するならば、風の人が情報提供し、土の人は発意、企画する。それを風の人が助言し仲間を集めながら、楽しい学習を重ねていく。土の人はさらに探検し、表現し、制作・伝達して、提案、反省をする。風の人はそのを意味づけし、価値付けしながら、理論化し制度支援する。このタンケン・ハッケン・ホットケンの風の人、土の人の融合の目線は、柳田国男が言いました「漂泊の人」と「定住の人」とが、現代に、創造的な里山里海や里まちづくりにおいても共通する多様な人々の混ざり合いの効果と役割を引き継いでいるのではなかろうかとおもうのですが、いかがでしょうか。以上で私の話を終わります。有り難うございました。



< 風の人 >	< 土の人 >
・情報提供	・発意・企画
・助言的支援	・ダンドリ・シタゴシラエ
・楽しい学習	・仲間を集める
・発見・評価	・探検・表現・制作
・意味づけ・価値づけ	・発表・伝達・協議
・理論・制度支援	・提案・実践・反省

Thank you !!

●コメンテーター中村俊彦氏からのコメントに引き続く質問

延藤先生には、本日の午前中の分科会から、千葉のみんなの取組の発表も聞いていただきました。この「千葉の里山里海に関する取組の特徴、またその今後に対するアドバイス等」を頂ければとおもいます。

●延藤先生の回答「千葉には大きな未来がある！」

過分なるコメントを頂き有り難う御座います。最後に、千葉のことをもっと話しをするようにとのご注文を頂きました。

午前中の分科会のご発表の場によせて頂きましたが、あの多様な皆さんの熱心な活動を通して、千葉には大きな未来があると感じました。その発表にふれながら、これからの千葉の在り方について、本日は6つのキーワードにして皆さんにお届けをし、今後の皆さん方の活動に役立てて頂ければとおもいます。

本日の第1のキーワードは「畜産・土木・園芸・調理・文理の総合性を学ぶ若者たちの力」。分科会のなかで現地の高校生の発表が御座いました。その発表の一端にふれ、普通の高校生とは違うと感じました。文化系、理科系かの話ではなくて、生きとし生けるもの森羅万象全てを総合的に学ぶという若者の力が、この南房総市で生まれている。この「若者の力」というのは、その大きな未来を約束しているのではないかとおもいます。

2番目は、「場所の力は、里山・里海・里まちへの人間の継続的なかわりから」。皆さんの発表は、まさにそれぞれの地域には、個性ある固有の「場所の力」がある。それは単なる資源でも

景観でも空間でもない、里山、里海、里まちという人間と環境の共生の持続の過程から育まれていくんや。この場所の育み、場所の力のキーワードが第2番目であります。

3番目は「再生とはぐくみの活動を自然だけではなくて古道」。白浜で里見古道を再生回復しようとする取組の発表がありました。まさに里山里海の活動には、自然を相手にするだけでなく、「地域が誇る文化」がある。今では自然が繁茂して古道には入れなくなっていますけれども、その回復に子ども・住民・行政の協働で時をかけて取り組む。この活動も大変重要とおもいます。

4つ目に重要なキーワードは、「徳と誇りと想いを育む地産地消の食と健康茶」。私は、ガンにも治る糖尿病にも治るお茶を飲ませて頂きましたけれど、加えて、南房総の小学校は全国にもめずらしいご飯を食べて健康になろうと、なんと70食レシピが用意されている。そういう地産地消の食やお茶を大事にしながら次世代の健康を育む、そこから、元気に生き、他者を敬う徳、そしてまさに「地域に生きる誇り」を、たとえ就職や進学で他の地域に行っても、子ども時代過ぎたこの地域に誇りを持ち状況が許せば将来またこの地に帰ってくる。それには子ども時代に誇りのある日々の暮らしが大事なんや。それは日々食べること飲むことからや。また、それにはおっちゃんやおばちゃんの「ふだんの語り」が重要なことも話されていました。

そして5番目は『やまももの旅』など紙芝居やカルタで地域文化の心を次世代に伝える」。紙芝居がようこんだけ傑作、力作がそろっているなあと、この地域の自然に対する歴史に対する愛着を内から誘発してくれるような紙芝居やカルタの発表が御座いました。

先ほど、東京湾の三番瀬を守る活動をしている方から素晴らしいカルタを頂きましたが、こうした、遊び心と表現する力を持って「次世代に里山里海の文化を伝える」。これは、この千葉の誇るべきスタイルではなかろうかと感じました。

そして6番目に重要な「まるごと今ある豊かさのタンケン・ハッケン・ホットケンを多様にやろう」。ただタンケンするだけでなく、感動を表現する。表現をまた伝達することによって、多くの地域の人々に、あるいは行政や企業にも里山里海の文化をとどける。今ある、このまるごとの豊かさを、このように楽しみながらタンケン・ハッケン・ホットケンを多様に試みるのも、千葉スタイルとしての重要な方法ではなかろうかとおもいます。

最後にこの6つのキーワードの頭文字をあらためてよんでみたいとおもいます。畜産の「ち」、場所の「ば」、再生の「さ」、徳の「と」、やまももの「や」、まるごとの「ま」、縦に読んでみましょう。なぜか「ちばさとやま」になっているでは御座いませんか。「これでいけるやんか」という予感が立ち上がってきたとともに、まさに「千葉の里山里海、里まちを今まで以上に育もう！」これが千葉スタイルであり、未来に向かって発信するキーワードということで取りまとめてみました。

触発される沢山の豊かな活動を学ばせていただいたことに感謝を申し上げるとともに、千葉里山里海は「これでいけるかもわからへん」という予感が立ち現れてきたというところでお開きにしたいとおもいます。ありがとうございました。

ち	畜産・土木・園芸・調理・文書を総合的に学ぶ若者の力
ば	場所の力は、里山・里海・里まちへの継続的なかわりから
さ	再生とはぐくみの活動を自然や古道で、子ども・住民・行政の協働で
と	徳と誇りと想いを育む地産地消の食と健康茶
や	「やまももの旅」など紙芝居やカルタで地域文化の心を次世代に伝える
ま	まるごと今ある豊かさのタンケン・ハッケン・ホットケンを多様に
千葉里山里海里まちを育もう！	

延藤安弘先生との出会いと学び

里山シンポジウム実行委員会委員（元千葉県立中央博物館副館長）中村俊彦

今日は、延藤先生の楽しくまた内容深いお話をお聞かせ頂き誠に有り難う御座いました。今回、延藤先生を南房総にお招きするきっかけ作りをした一人として、私たちの活動と延藤先生とのかかわりについて、少しお時間を頂きお話させて頂きたいとおもいます。

先生は、地域を元気にするためには「風の人」と「土の人」の協働の重要性をお話されましたが、もう一つはその両者の出会いの場の重要性についても述べられました。私は博物館で長く務めていましたので、住民の「土の人」が地域の学芸員となって、「風の人」にその素晴らしさや誇りを説明する取組はすごいとおもいました。そして、先生のもう一つの重要な視点は、里山里海の素晴らしさを子どもたちの未来のために伝えることだと感じました。この素晴らしさは都会の子どもたちにも届くようすることが、先生の「里まち」の取組の根本になっていたこともよくわかりました。

延藤先生と私との最初の出会いは、1993年1月環境庁の「子供たちに対する環境教育の充実に関する体系的調査委員会」の「環境学習の場の創造部会」の会議でした。その時、先生は部会長として「場」について説明されたのが印象的でした。「物理的空間を意味するスペースと人のかかわる場のプレイス」との違いを解説され、さまざまな環境学習のプレイスを「都市ゾーン-自然ゾーン軸」と「行政主導-市民主導軸」とで整理されました。

先生が提唱された、「土の人・風の人」の論理を私が最初に学んだのはいつだったかは定かではないのですが、まさにこの房総で進められてきた里山保全・再生活動の底辺を支える論理です。

実は私は、この房総の地は、人間が住む場所としては世界で最も豊かな所と言って来ました。それは暖流黒潮と寒流親潮がぶつかる房総の海及びその影響を受ける陸は、世界の南北の生物が出会う場であり、このきわめて豊かな自然環境や生物多様性を、私たちの先祖は巧みに利用しながら豊かな里山里海を育ててきた歴史があります。その事を私が認識するきっかけは、外国の人々に房総の自然を案内した時の学びでした。私にはあたりまえだった房総の自然に対し、外国の人たちは、その豊かさに感激し驚いていたのでした。私ははっとして、その後のいろいろな調査研究により、元々の豊かな房総の自然環境及び生物多様性を、人々はさまざまに利用しながらも大切にし、さらにより一層豊かな自然にしてきた経緯もわかってきました。

土の人と風の人協働の取組を、私たちが実践した最初は、2003年11月、この南房総の旧丸山町で活動していた「ぼんた里山の会」と共同し、泊まりがけで地域の魅力発見を試みた「ちば・谷津田フォーラム in 丸山」でした。初日は里山コースや里海コースのグループにわかれ、地域の土の人と、外からの風の人がそのコースを巡り、その魅力だけでなく、違和感のある場所などについても出し合い、その夜は遅くまでみんなでまとめ、翌日は結果発表を兼ねたシンポジウムを開きました。討論には当時の役場の行政担当者も加わりました。そして、その結果として課題も明らかになりました。土の人・風の人が集い活動していくためには、その要となる場や組織が必要ではないかということでした。その後、今日の司会を担当してくれている小西由希子さんから、みんなで力を合わせていく活動を支える仕組みとして「やつだ・さとやま保全活動センター」の提案がありました。この提案は、旧丸山町での取組に参加していた県行政の方の努力もあり、

今の「ちば里山センター」の設置につながったのでした。

ちば里山センターは、今では私たちの里山活動の大きな要となっていますが、里海に関しては、東京湾の三番瀬などで私たちはフィールドミュージアムの活動もおこなってきました。そのような里海里山の長年の活動は、今日の里山シンポジウム「里山里海の恵みと食」での延藤先生のお話につながったとおもいます。

国の方では、東京オリンピック後も視野にいれ、運命の10年計画として、新しい「首都圏広域地方計画」が、今年3月に策定されました。その中の「共生首都圏の形成と都市農山漁村対流」6つのプロジェクトの一つに「エコシステムサービス充実プロジェクト」が立ち上がりました。これには、うるおいのある都市形成のため、自然・文化の豊かな里山里海づくりの推進が謳われています。このような国の政策の流れもふまえ、私たちは益々頑張っていきたいとおもいます。

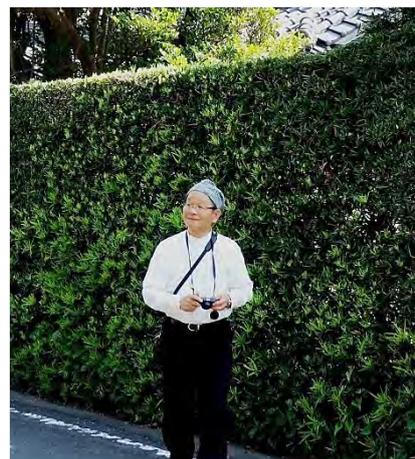
そのような私たちの活動ですが、延藤先生には、千葉の里山里海に関する取組の特徴、また今後に対するアドバイス等を頂ければとおもいます。有難うございました。

延藤安弘先生を囲む語らいの会

今回の全体会当日の夜、延藤先生を囲んで、実行委員のメンバーを中心に20名での情報交換会が、実行委員のお一人の遠藤イサムさんのご自宅でおこなわれました。改めて延藤先生からの里山シンポジウムの感想が述べられました。



「延藤先生の感想の要点」: 房総族には大きな房総力がある。風の人、土の人とともに水の人が房総にはいるからだ。太平洋から昇る朝日、そして夕日の沈む東京湾のかなたには富士山も見えるとといった自然の豊かさも房総にはある。うきうき、わくわくの遊び心を発揮する住民と行政の共同の創造の取組がみてとれた。トラブルも多いと思うが、それもみんな楽しいドラマとして、定年のないボランティアの房総族の力を更なる房総の力にして頑張ってもらいたい。



翌日は遠藤イサムさん、笹子全宏さん、私とで、延藤先生を南房総市の安馬谷地区の里山にご案内しました。先生は風の人として、特にイヌマキの生垣の素晴らしさを私たちに伝えて下さいました。さらに全体会当日は体調をくずされお会いできなかった今回のシンポジウムの南房総実行委員会長の横山武さんのご自宅にも伺いました。横山さんは大変元気になられ、延藤先生に南房総の里山自慢をされ、みんな大いに盛り上がりました。（中村俊彦）



地域開催分科会報告

分科会 里山再生から活かされている里山活動（生物多様性万華鏡）

■コーディネーター 佐藤 聡子

■主催団体 NPO 法人バランス 21

■報 告

●谷津田再生5年目を迎えて、田植えイベントは、都市にお住まいのみなさん家族での参加が多くなりました。（幼児も大勢）

5月1日から3日、4日、7日、10日、殆どの田んぼ（250人）のみなさんで田植え終了。大学生の応援もあり、連日賑やかな田植え風景になり、午後は、ザリガニ釣と今年、整備が進んだ里山林の山越え遠足体験ができました。毎週（火）と第1・第3（土）と作業活動日を増やして参加しやすい工夫を始めましたが、まだ、定着にはなっていません。

「良い場所をつくる」「里山を元気にしよう」

「私たちが元気に楽しもう」はじまりました。

みなさん、働き者で、つつい沢山頑張っています。

毎月、自然観察調査、鹿島川の水質調査、谷当村落のゴミ拾い、溝さらいなども交代で参加しています。

田植えが終わるのを見ていたかのように、カルガモ2羽がやってきました。朝はダイサギ、アオサギの常連が来ています。キジ、ホトトギスの鳴き声で賑やかになります。アカガエルもすっかり常連です。アシナガグモやナガコガネクモも毎年、稲の害虫をゲットしています。

●7月から8月は、虫取りの子ども達で週末賑わうようになりました。周辺の竹を切って、七夕飾り、水鉄砲を作って遊ぼう！今年は、夜の観察会開催（7月30日）カラスウリの花を見る。セミの脱皮観察。セミの抜け殻を集めて、ホタルの乱舞を見て、家族で興奮の一夜になったと報告がありました。

●千葉自然学校の親子塾のみなさんは、塾長：中村俊彦氏の話を選び、晝間初枝さんから、昆虫標本と作り方を学び、自分で昆虫たちをゲットしたのを見せっこするなど大興奮の夏休みとなりました。サワガニ、オニヤンマのヤゴ、カワニナも発見！



分科会：谷当地区 里山に、新たな参加者を、呼び込みたい！

■コーディネーター 金親博榮

■主催団体 わたしの田舎「谷当工房」
谷当グリーンクラブ
NPO 法人バランス 21

■報 告

親子、家族で、里山で遊ぶ、初体験の市民を、呼び込みたい。そんな思いから、千葉市が主催する、「千葉あそび」体験プログラムに応募し、25年初より春夏秋冬の年4回の「谷当で開く里山体験シリーズ」を開催してきました。各シーズンとも、同一内容の企画を、3ヶ月間で最低6回開催する事が必須の条件です。イベント内容、料金などは、各号の3ヶ月前までに提案し、市との協議の上決定するものです。

千葉市は、里山以外の 千葉市内での各種の体験観光のイベント情報を、冊子にまとめ、市内の公共施設などで、配布、PRしてくれます。エントリ費は、無料です。

田んぼ、里山林、畑や、加工食品作りで、かつて、千葉市谷当の田舎でやっていた、「田舎あそび」「仕事あそび」を体験してもらい、里山、谷津田の仲間になってくれる人をゲットする。そんな希望を持って、開いております。

結果的には、相応の料金をいただきながら、多くの日程が20名から50名程度で満員御礼となってきました。

親子、家族、若い人たちが主な参加者となり、里山の素晴らしさ、田植や、稲刈り、泥んこあそび、自然観察、虫取り、ザリガニつり、青竹を切って、のこぎり、ナイフの使い方を覚える、食器、弓、竹ぼっくり、家族の箸を作る、流しソーメンで、おなか一杯食べちゃう、ピザを作って、石窯で焼く、芋ほり、焼き芋、筍掘り、ネイチャーゲームで自然の楽しみ方を学びながら、初対面の人が交流する、ゆったりと流れる自然の中で、みんなが笑顔で、満足し、帰路につく。そんな光景が、谷当の里山で、繰り返し創り出されています。自家用車で訪れて頂き、水洗トイレのある駐車場「谷当里山パーク」も完成し、これからもっと沢山の方々を、谷当に呼び込みたいと考えているところです。施設作りや、舞台となる里山の環境整備、一番大切なイベントごとの世話役、リーダー、行政、大学と地元の広範な協力があってこそ、実現した、里山を核とした小さな地域づくりの実施例です。乳児～小学校低学年の家族のみなさんの賑やかな声が里山に響き渡っていました。体験を重ねるごとに、親子で自然に向き合うことも楽しく、里山林の斜面を登ったり、落ちこちて泥んこになったりしています。焚き火の扱いも上手になりました。目線が低い分、昆虫見つけもうまいものです。(大人の方が癒されます)



分科会 地域の活動：「東京湾干潟の風景」展覧会と三番瀬自然観察会 「ふなばし夏ボラ」研修(中学生～高校生～大学生)

■コーディネーター 佐藤聡子 齊藤 清
■主催団体 フィールドミュージアム
・三番瀬の会

■報 告

夏休みボランティア活動「ふなばし夏ボラ」
2回目の募集活動に参加しました。昨年の経験から、今年の活動計画実施には、学生さんの応募は、意義ある活動展開になりました。

● 「写真でみる東京湾干潟の風景」昭和30代撮影の写真(故)林辰雄氏撮影(千葉県立中央博物館所蔵)他65点と現在の三番瀬干潟の生きもの(プランクトン含め)写真と貝殻オブジェ

を展示しました。8月9日～14日開催。展示と同時に、講座1：林辰雄氏の写真について。白井豊氏(県立中央博物館・学芸員)2：「三番瀬かるた」会。講座3：田久保晴孝氏(同会共同代表)現在の三番瀬の生きものたちと干潟の歴史について。展示準備(搬入～搬出)受付貝殻オブジェづくりなど、6日間、交代でそれぞれの研修を展開しました。私たちの会も学生さんの協力は大変助かりました。研修生にとっても、昭和30代の写真と現在の三番瀬の写真を専門家の話しから知ったことは、いい時間だったかもしれません。「頭がいっぱいになった」の感想もありました。(延べ16人の研修生)



● 8月16日、19日三番瀬の観察会研修の2日間、中学生と高校生の研修になりました。(延べ18人の研修生)快晴の大潮の干潟は、広々として快適でした。

岸にはアオサとオゴノリがかなり堆積していた。果樹園の肥料にするからと集めている人。

干潟に点在する穴から、コメツキガニのちびを見つけ、アサリの稚貝は、ザクザク手ごたえ、ホンビノス(外来種)シオフキ、オオノガイ、

カキの殻、カンザシゴカイの巣貝など沢山の生きものに出会いは感激でした。市川市との境の砂浜では、チゴガニが白い手袋を巣穴から出しておいでおいでのご挨拶。ウミネコもアオサの下の小さい生きものを熱心に餌採り(この日は、アオサが干潟一面広がっていました)、アカクラゲ、ミズクラゲも見つけて来ました。潮干狩りには、来た事はあるけれど・・・こんなにいろんな生きものがあることに感激の声。帰りがけに、ゴミ拾いもして来ました。

海浜公園の学習室(仮設)田久保氏のレクチャー(観察手帳を使って：会で発行したものです)埋め立てから守った東京湾三番瀬の干潟の歴史も学んでもらえたかな?採って来たものを分類、名前付けをして、研修は終了しました。中学生、高校生一緒の研修は私たちにもいい学びとなりました。また来てね!夏休みの研修(総勢：34人)いい企画実施となりました。

● 「船橋国際交流」の子ども達と秋の干潟観察会10月1日(土)実施予定です。昨年40人の参加で好評でした。今年も実施計画のリクエストがあり、また、ひと頑張りとなります。



<南房総お国自慢>

1. 南房総市 富浦地区

団体名	NPO 法人富浦エコミュージアム研究会（代表者 鈴木勇太郎）
発表者	鈴木 勇太郎
テーマ	ふるさと 南房総の魅力を伝えたい

「子どもたちには、ふるさと体験を、成人には、ふるさと再体験を」

これが私たち富浦エコミュージアムの願いです。エコミュージアムとは、その地域の自然、歴史、文化、産業、その他、あらゆることを題材とする活動です。

今から23年前に活動を始めて以来、途中、3回の変遷がありました。それは、

- 1 学校の完全5日制の実施を期に、子どもと成人を分けることにしました。
- 2 現場での解説を言葉だけでなく、紙芝居も使うようになりました。これで内容も深くなり、また、活動の場所も広くなりました。
- 3 南房総市の誕生により、活動の地域を富浦町に限定することなく、南房総全域にまで広げ始めました。

きょうは、その活動の一端を紹介しましょう。

県立自然公園、大房岬には、数多くの名所があって人々を楽しませてくれています。その中でも、子どもたちの一番人気は、弁財天の洞窟探検なのです。それでは……

{洞窟探検した男のものがたり} の始まりです。

大房岬の一番、西の端、東京湾を見渡す第二展望台から増間島へ降りる階段を150段、下った右側に大きな洞窟が口を開けています。中には弁天様が祀られていますので、昔から「弁財天の洞窟」と呼ばれてきました。

中へ入ると、奥は真っ暗闇、昔から、「どれ位、奥が深いのか、確かめられたことがない」とか、或いは、人によっては、「ここから8キロメートル先の那古の弁財天まで続いている」ともいわれています。

或る時、一人の猟師が、

「ようし、それなら、おれが確かめてきてやる」と、言い出しました。

驚いた村人たちは、

「おい、やめろ、やめろ、中には、どんな化け物が住んでいるか分からないではないか、食われてしまったら、どうするんだ」

と、止めましたが、男は、

「いや、何が何でもやってやる」

と言って、鉄砲をかついで、一匹の犬をつれて洞窟へ入って行きました。

さあ、村人たちは心配で、心配でたまりません。

「あいつ、だいじょうぶかなー、生きて帰って来れるかなあ」

と、みんなが入口で男が帰ってくるのを待ちました。

ところが、

一日たっても、帰ってきませ

二日目になっても駄目です。

ようやく、三日目の朝、洞窟の奥の方から、何やら物音がしたかと思うと、何と、血だらけになった犬が、よろよろと這い出てきて、入口で、ぼったり倒れて死んでしまいました。

帰ってきたのは、犬だけだったのです。

洞窟探検に出発する時に子どもたちは、

「僕は洞窟なんか怖くないよ、平気だよ」と、張り切るのですが、途中で、このお話をします。洞窟に近くなった所で、もう一つ、昔、役の行者が海賊を捕らえて、この洞窟へ閉じ込めた{金の竜}のお話をするので、もう、いけません。

「一人で入って、帰ってくる、勇気のある子はあるか」と、呼びかけても、乗ってきません。結局、「みんなで入れれば怖くない」

と、ぞろぞろ入ることになってしまいます。

大房岬に伝わる「弁財天洞窟」のお話でした。



<南房総お国自慢>

2. 南房総市 富山地区

団体名	いわい案内人の会（代表者 井野 宏一）
発表者	松本 貢
テーマ	木曜会について

私たちの会では、毎週木曜日に都合のつく人が集まって「木曜会」という活動を行っています。きょうはこの会の活動についてご紹介します。

私たちは、里見八犬伝で有名な富山の案内をしたり、親水公園、駅前公園や構内の草刈り・除草、草花植栽をしています。

私たちは駅を地区の玄関だと心得ています。みなさんには、そこを里山里海の入り口だと考えていただけるとありがたいです。公園には、ブランコ、滑り台などの遊具があって、地区外からもからたくさんの人が子供を遊ばせにやって来ます。なぜか、父親が子供を連れて遊びに来ていることが多いのが特徴です。ちょっと照れくさそうな父親の顔と、満足した子供の顔が対照的です。

駅の構内にはかつて行政が花壇と小さな池を作りましたが、現在は JR が管理しています。そこで私たちを含めた 3 団体が作業をしています。去年は JR の特別列車の車内放送で「内房線で唯一のボランティアが整備している駅」と宣伝してくれました。また、JR 職員が池にメダカを放して私たちに協力し、集客に努力してくれています。

これらのことから、行政が観光と子育てを考えて、先見の明をもって他地区にはない遊具を設置してくれました。JR は来訪者を快く迎えようと努力していることを知りました。そこで私たちは、ただ草刈をすればよいのではなくて、行政や JR の意図の実現に協力すべきと強く思いました。

現実には現地にはまだ「田舎」が残っていますが、JR、行政はがんばって里山里海の入り口を残してくれています。そのことを私は皆さんにお伝えして、話を終わります。



富山（とみさん）

「南総里見八犬伝」の始まりの舞台。八犬士 のひとり、親兵衛が育ったとされるのもここ。

（「里見氏と南総里見八犬伝」 南房総市発行のパンフレットより）

<南房総お国自慢>

3. 南房総市 三芳地区

団体名	里山わんぱく塾（代表者 菅沼 弘夫）
発表者	菅沼 弘夫
団体が活動を開始した時期	平成16年5月～
会員数	約30人（30人を基準にその年度により多少の変動あり）

◆団体の活動の趣旨

南房総市中池の谷1180番地 中堰親水公園とその周辺を拠点として活動
 中堰は昭和3年農業灌漑用水の溜め池として完成している。
 その後 施設の老朽化により平成9年度、10年度の2ヵ年をかけて大々的な改修工事を
 実施し親水公園となる。
 堰を囲む山々は低く日照時間は長く水面は明るく景観がよい。堰の周辺は多様な植物が
 繁茂する。また、周囲の散策道や尾根歩きができる山路もあり、子どもの興味を引く。堰
 にはフナや鯉など在来の水生生物が生息しており、ブラックバスなどの外来魚はいない。
 堰堤下の水路や周辺には水生昆虫や両生類など様々の生き物や植物が存在し、豊かな自然
 環境に恵まれている。子ども達に自然体験をさせたい。
 色々な自然体験をすることによって健全な心と逞しい体を養い、望ましい仲間意識を育
 てていきたい。このような願いで「里山わんぱく塾」を開設する。

◆活動内容の紹介

- 1 水稲作り （◎は安房の子と千葉の子との交歓会、作業も合同）
 ◎田起こし、◎代掻き、◎田植え、◎田ノ草取り、◎稲刈り、◎掛け干し、◎脱穀、
 ◎収穫祭、まともは12月の◎正月飾り作り。この中で◎は全員で取り組む。
 ◎泥んこ運動会
- 2 その他の自然体験 （里山わんぱく塾独自の取り組み）
 堰でのフナ釣り大会、水鉄砲、シャボン玉、水生の生き物探しなど
 堰の周囲散策道や尾根歩き、木登り、ネット遊び、滑り台、シーソーなどの遊具、
 ミニサッカー、羽根突き、竹馬などの多様な遊び
 巣箱作りやビニール製品のぞうり作り、花壇作り

◆写真





◆年間スケジュール（平成28年度予定）

平成16年里山わんぱく塾開設と時を合わせたように早稲田大学ボランティアセンターから「学生達が里山の仕事をしたいと希望しているのは是非叶えてやりたい」ということからこの事業が始まる。年3～4回里山のボランティア活動の内 夏休みの1日だけ子ども達を指導しながら、共に学び遊ぶ事を目的に10年間の活動が経過する。平成25年度で早稲田大学ボランティアセンターの活動は終了し、平成26年度より学生の有志が自主的な活動グループを結成し現在にいたる。三芳村が非常に魅力ある所なので都市部の子ども達にも自然に親しみ触れさせたいとの願いをもって開始された。その活動は以下の通り。

千葉市の小学生に「食と子どもの広場三芳村」の名のもとに三芳中堰地区で自然体験をしようと呼びかけ、学生6人の中心メンバーが活動を開始現在に至る。

中心の学生に賛同する一般学生がその都度参加し、昨年度1年間を通じて参加した学生は延べ80名に及ぶ。活動は中堰を中心として「里山わんぱく塾」と「食と子どもの広場三芳村」との交歓会であり合同作業となっている。

以下の活動で7回だけが里山わんぱく塾独自活動となっている。

4月23日（土）	第1回春の野山を歩こう	（里山わんぱく塾）
5月7日（土）	代掻き	<u>里山わんぱく塾と食と子どもの広場三芳村との合同作業※</u>
5月14日（土）	田植え	※
6月18日（土）	田ノ草取り	※
6月25日（土）	親子フナ釣り大会	（里山わんぱく塾）
7月3日（日）	2回目田ノ草取り	（食と子どもの広場三芳村）
7月24日（日）	泥んこ大会	里山わんぱく塾と食と子どもの広場三芳村との交歓会
8月20日（土）	水遊び	（里山わんぱく塾）
9月10日（土）	稲刈り	※
9月24日（土）	脱穀	※
10月22日（土）	収穫祭	子どもの作るおにぎりとイノシシ汁で乾杯 ※
11月19日（土）	里山であそぼう	（里山わんぱく塾）
12月10日（土）	正月飾りを作ろう	※
1月21日（土）	冬山を歩こう、昔の遊び	（里山わんぱく塾）
2月18日（土）	花壇作り、色々な遊び	（里山わんぱく塾）
3月11日（土）	卒業生をイノシシで追い出せ会	（里山わんぱく塾）

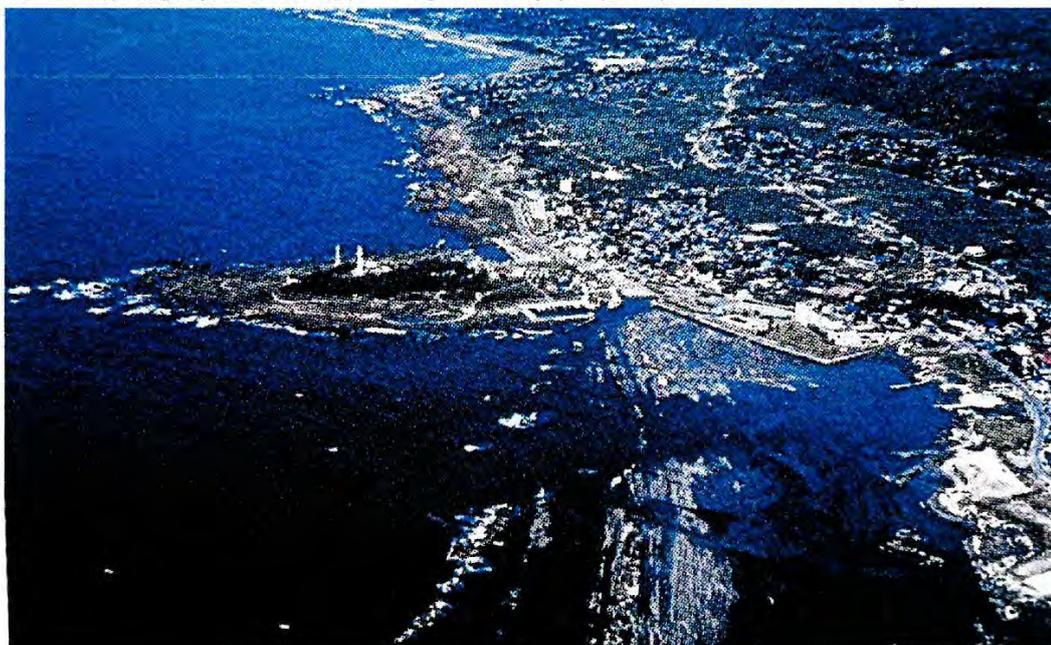
南房総お国自慢・白浜町

白浜地域づくり協議会「きらり」

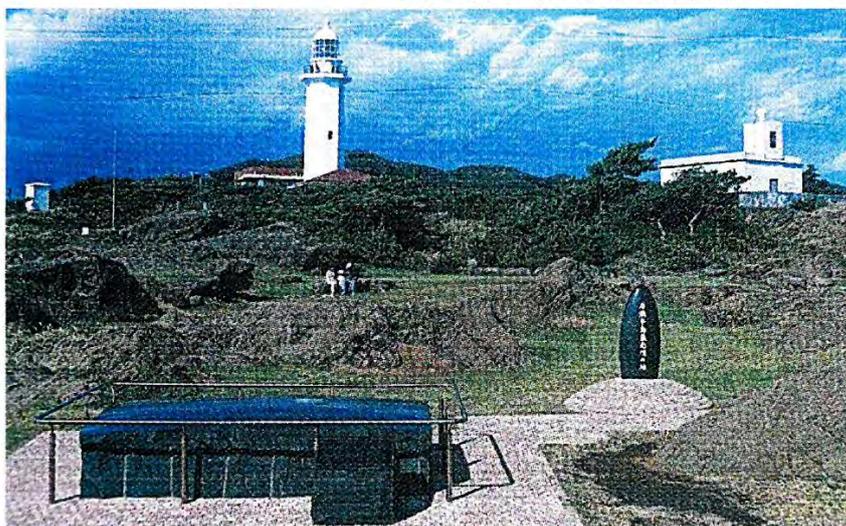
報告者 栗原 猛

房総半島最南端のまち「しらはま」は、東西に長く、南より海岸、平坦地、丘陵が帯状になっております。海岸部は複雑で特徴の有る景観を有し、南房総国立公園に指定されています。変化に富んだ海岸の岩場では、今でも素潜りの海女によりサザエ・アワビ漁が盛んです。白浜地区のシンボルでもある野島崎灯台は近代的な様式灯台として日本で2番目に誕生したものです。世界の船舶を導く東京湾の玄関として、会場31km四方を照らし、美しいその姿から「白鳥の灯台」と呼ばれ親しまれています。

「しらはま」は沖合を流れる黒潮の恩恵を受け、冬は暖かく、キンセンカ、ストックが露地栽培され花摘みで多くの観光客を魅了しています。



太平洋に突き出た野島崎



白浜灯台と房総半島最南端の碑



海女さん像

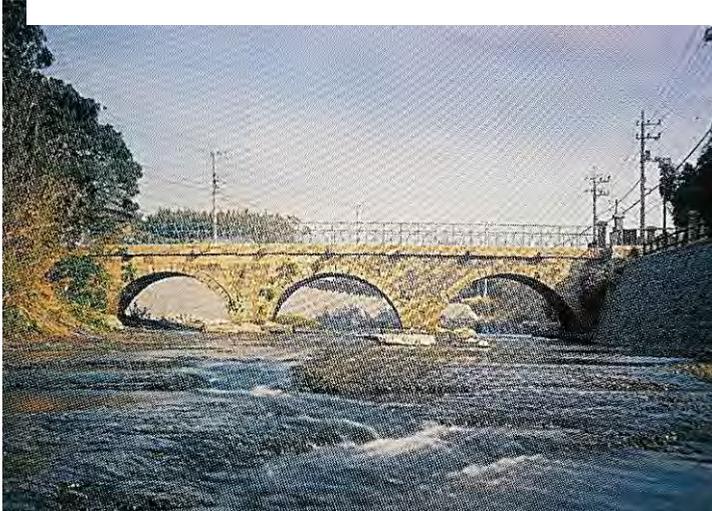
南房総お国自慢・白浜町



毎年、海の日に行われる白浜海女まつり、クライマックス「海女の夜泳」



夏、オートキャンプが出来る根本オートキャンプ場



明治21年に完成以来100年以上の歴史を刻んできた「めがね橋」



前期・房総里見氏の菩提寺、杖珠院



白浜でいちばん作られているのはキンセンカ、花畑は、早春の風物詩



白浜小学校3年生、農業体験授業、キンセンカ、種蒔きから花摘みまで

<南房総お国自慢>

5. 南房総市 千倉地区

団体名	たのくろ里山保存会 （代表者 渡邊 俊彦）
発表者	石井 賢司
テーマ	「みんなで築く、たのくろ里山保存会の活動」
1 地域の概要	<p>私達の集落は、千葉県房総半島の南端、南房総市千倉町にあります。海岸線の国道は、露地の花が真冬でも咲き誇り、週末は花摘みの観光客でにぎわいを見せます。川戸地区は、千倉町の北西部に位置し、小高い山に囲まれた盆地状の土地に、86戸の集落で地域ぐるみで環境美化に努めています。</p>
2 むらづくりの動機、背景	<p>平成12年に集落の30代から50代の青年たちが「何も無い地区だけど、みんなで力を合わせ何かしよう」と立ち上がり、集落の農道に彼岸花を植え付けたのが始まりです。彼岸花には、「また、会う日を楽しみに」という花言葉があり、地域を離れることになった仲間に「いつか会える日を楽しみにしている」とのメッセージをこの植栽活動に込めました。平成13年には、地区にある千倉総合運動公園の竹やぶ化した土手の伐採を行い、草刈り、植栽活動は集落で環境美化に取り組む意欲を大きくし、盛り上げました。</p> <p>活動を始めて4年、活動が地元で根付き始め、集落に隣接した町有林（現市有林）を整備し、地区民の憩いの場や交流拠点として活用していこうと話し合いがもたれました。これを受けて当時の千倉町（現南房総市）も積極的に協力してくれました。こうして、「たのくろ里山保存会」を組織し、里山活動協定を結び「おんだら山（自分たちの山）」と名づけた荒れた山林を整備し、地区住民や市民の交流の場として、植樹や里山活動、都市農村交流活動を中心に無理せず、欲張らず、自分たちの身の丈にあった形で集落活性化の活動が長く継続できるよう少しずつ頑張るつもりです。</p>
3 これまでの主な活動	<p>①小学生卒業記念植樹 ②自然体験塾 ③上総掘り ④里山の保全 ⑤果樹の栽培と販売</p>
4 写真紹介	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>小学生卒業記念植樹 「わたしの木」として、1本1本の木に個人の名前や、メッセージを記したプレートが付いています。</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>自然体験塾 山のリース作り 冬の森を散策し、つる、木の実、落ち葉を各自で集め採集してリース作り。</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>自然体験塾 お正月飾り作り 新年を手作りのお飾りで迎えましょう。</p> </div> </div>

<南房総お国自慢>

6. 南房総市 丸山地区

発表者 上野勝美

時代の足音に耳を傾けて

町は美しくなければ生き残れない

私の住む丸山地域は北に千葉県最高峰の愛宕山を仰ぎ、その源から丸山川が南下し丸山川を中心に東西に開けた肥沃な田園地帯が広がり里山を受けて集落が張り付いている。

先人は水と肥沃な土地に、その生活の拠点を築いてきたことでしょう。丸山には数多くの遺跡・古墳などの文化財が多くあります。加茂遺跡からは日本最古と言われた丸木舟が出土しており縄文人の生活の一端を伺い知ることができます。また、弥生時代の粟野台遺跡・古墳時代の永野台古墳と書く時代の史跡をしるしながら、平安時代末期に丸氏の名前が文献に、その後、史記「吾妻鏡」にも丸氏が多く登場し室町時代まで続き文安二年里見氏が安房を統一し江戸時代に入り徳川幕府の天領となったまま、明治時代を迎え変遷の後今に至っています。文化財や遺跡は丸山川流域に歴史をたどるように数多く点在しています。

昭和に入り 29年から30年頃に市町村合併が始まり私達の地域も昭和30年3月丸村・豊田村・千歳村と海発村の一部が合併し丸山町が誕生したのです。この当時の合併は教育環境施設整備の合併とも言われ、一つの町に一中学校とこのことの合併であったようです。

合併後の丸山町を分析してみると合併後の10年間は中学校の統合を始めとして安房地域では鉄筋コンクリート3階建ての校舎の建設、体育館。プールと建設し、二校ある小学校も鉄筋コンクリート造りで整備し義務教育施設の整備充実をはかりました。

併せて30年代後半から昭和40年代は第一次農業構造改善事業で圃場整備や、メロン温室、観葉植物温室、みかん山の造成を、更に丸山川の左岸・右岸の地域に400haを超える県営圃場整備事業を実施し、豊かな田園空間と道路、排水路など生活環境を整え、第二次農業構造改善事業では酪農団地、カーネーション団地、花卉・花木団地などの事業を実施し50年代前半には全国15地域のモデルである高度農業生産モデル地域整備実験事業を展開し、農業振興に力をいれた時代でした。

そして、併せて昭和50年代は庁舎・公民館の建設、丸地区にはコミュニティセンターの建設、公民館を中央公民館として位置付け、21の行政区に集会所、更には組単位とする小規模集会施設の整備を進めコミュニティ施策に力を注いだのです。

時代は昭和62年から平成に移る中で①丸山町らしさを創り出し②丸山町のイメージアップを図り③誰からも愛される郷土を築くために、「風車とローズマ

リーの里づくり」を進めたのです。

その視点とポイントは行政の文化化と景観行政です。

朝は朝星。夜は夜星。海岸近くの水田は砂利田のため、田の一角に井戸を掘って「はねつるべ」等の人力揚水を行い水田として耕作していました。汲み上げても、汲み上げても浸透してしまい農家は水管理に苦勞していました。昭和の初期からは風の力を利用した風車を回し、風車に連動する「ガチャポン」と呼ばれるポンプで汲み上げ最盛期の昭和18年頃には100基もの風車が林立。農村のどかな光景を形づくっていましたが昭和35年ごろには石油発動機にその座をゆずりました。固有の農業技術文化である「風車」を、個性と魅力あるまちづくりのためのシンボルとしたのです。

ローズマリーは地中海諸国の沿岸に広く自生している常緑性低木のハーブで海の雫と言われていています。丸山地域はローズマリーの故郷である地中海に位置するクレタ島やキプロス島と同じ35度に位置することから気候・風土もよく栽培に適していることから特色ある景観をつくりだし多くの可能性を秘めることに期待し、新たなまちづくりに取り組んできた。この様な町づくりが評価され内閣官房広報として新聞見開き一面の半分に掲載されました。

そして、里づくりは更に、全町を公園として整備し住みやすく、来訪者が住みたくなる町を目指し「ガーデニング・ツリー21構想」を平成12年3月に打ち立て、国道128号線とローズマリー公園を土台に国道410号線を北上する（天上に駆け上がる）大樹（木）に見立て町内21の集落で個性的な事業を立ち上げることを支援した。その一例として一集落一果実の事業が展開され、あんずの里・ブルーベリーの里・金柑の里・梅の里・プラムの里などの取り組みが行われました。

一方、町の職員（企画課職員中心）の動きとして安馬谷地先の町有地の企業誘致を含め、その土地利用を平成10年から検討したが、山林であるため平地が無く、企業誘致としての活用面積が充分取れない事などからして断念し、ガーデニング・ツリー21構想の拠点としての里山に磨きをかけることとし、手始めとして職員がチェーンソー片手に悪戦苦闘、11年から林業従事者のプロを頼み雑木を伐採し西暦2000年記念植樹を町民80人程の参加を得て実施、平成15年には安馬谷里山研究会が発足し、今では誇れる里山として位置付けられ20014年3月に森林セラピー基地の認定を受け、里山を愛する人々の手で更に磨きがかけられています。

町は美しくなければ生き残れないとは、住んでいて良かった、訪れてみて良かった、そこに住んでみたい地域であり、そこに住んでいる人々の心の美しさでもある。



南房総市和田町お国自慢

NPO法人和田地域づくり協議会WAO!

〒299-2703 千葉県南房総市和田町仁我浦206

TEL・FAX 0470-28-5411

1. 花の先駆者 間宮七郎平 氏



間宮七郎平(マミヤ シチロウヘイ)



経歴

生年 明治26年(1893)～没年 昭和33年(1958) 64歳

千葉県安房郡和田町で薬局経営のかたわら、大正8年ごろから花卉栽培に取り組む。

大正12年和田浦生花組合を設立、組合長となる。

流通機構の整備、新品種の導入につとめた。

2. 花嫁街道

お問い合わせ 和田浦歩こう会代表 庄司忠夫 TEL・FAX 0470-47-5858



鳥場山

標高266.6m。房総丘陵(嶺岡山地)の山の一つである。岩崎元郎の新日本百名山の一峰に選ばれており、房総では人気のあるハイキングコースとなっている。...



花嫁街道ハイキングコース

かつて、花嫁行列がここを通過して嫁いでいったことから名付けられた花嫁街道ハイキングコース。

山頂の鳥場山からの眺望は人気があり、房総の里山や、天気が良ければ伊豆大島や富士山が見られます。

そのほかにも、コース内に経文石・じがい水・駒返し・黒滝・向西坊等の史跡があり、周辺には「浜千鳥の歌碑」や「抱湖園」などの名所が数多くあります。

3. 自然の宿 くすの木



自然の宿 くすの木

〒299-2727 千葉県南房総市和田町上三原244-1

TEL 0470-47-5522

FAX 0470-47-5560



平成9年12月20日にオープンしました、自然の宿「くすの木」は、豊かな自然に恵まれた環境の中で、自然体験・調理加工体験・竹細工づくりなど、体験できる施設として多くの人に利用されています。

都市の子ども達には第二の故郷として、グループやご家族連れの方々には田舎でのリフレッシュの場として歓迎いたします。

自然の宿「くすの木」は、地域の住民で運営していて、人との出会いを大切に“かあちゃんのみ”“ふるさとの香り”を十分味わっていただける施設です。

4 道の駅「和田浦WA・O！」



道の駅和田浦WA・O！（ワオ）

〒299-2703 千葉県南房総市和田町仁我浦243

TEL 0470-47-3100



海と花とクジラの街で「たべ ある くじら」。

『道の駅和田浦WA・O!』は、「食べて」、「歩いて」南房総らしい海辺の休日を楽しむことが出来る、新しいスタイルの道の駅。田舎の空気の中でのんびりとひと休みしたいなあと思っている「あなた」を美味しく、楽しくサポートいたします！

全長26mシロナガスクジラの全身骨格標本

道の駅「和田浦WA・O!（ワ・オ）」の西側に、シロナガスクジラの全身骨格標本（レプリカ）が設置され利用者の皆様をお迎えしています。

標本の原骨格は1880年代初頭にノルウェー北部で捕獲したメスのシロナガスクジラです。日本国内では3体までレプリカが許可されています。全長26メートルで7階建てビルの高さに相当します。

<南房総お国自慢>

8. 館山市

NPO 法人たてやま海辺の鑑定団 発表者 竹内 聖一

「千葉県房総半島」南部に位置する「館山市」。東京湾アクアラインや館山道を通して首都圏から約 90 分。34.3 キロの変化に富んだ海岸線を持ち、黒潮の影響を受け、北限域のサンゴが生息します。また、ウミホタルの生息域としても知られ、多様性に満ちた貴重な海洋資源を有しています。

また、平均気温 16 度以上、一足早く春が訪れる温暖な気候に恵まれています。



■たてやま・海辺の鑑定团的「館山の魅力」海！

【沖ノ島】鏡ヶ浦と呼ばれる館山湾の南側に位置する周囲 1km の無人島で東京湾の内湾。

【海岸線】海洋の影響も受ける平砂浦海岸や、普段は波穏やかな鏡ヶ浦のような内湾と両方あります。

【サンゴ】20 種類以上の造礁サンゴが生息しています。

【魚たち】黒潮の影響はもとより、親潮の影響も受ける豊かな海です。

【海辺の生き物】潮が引くとたくさんの磯の生き物が観察できます。

【貝殻・ビーチコーミング】生態豊かな海岸線では、タカラガイに代表される、たくさんの貝殻や楽しい漂着物が見つかります。

【ウミホタル】東京湾アクアラインの「海ほたる」のイメージにもなった海の生き物「ウミホタル」が生息しています。

【釣り】周りは海ばかり豊かな海は、船釣りはもちろん、釣りのポイントがたくさんあります。



■たてやま・海辺の鑑定团的「館山の魅力」沖ノ島

沖ノ島(沖ノ島公園)は、南房総館山湾の南側に位置する高さ12.8m、面積約4.6ha 周囲約1kmの陸続きの小島(陸繋島)です。この島は約8000年前の縄文海中遺跡や世界的に注目されている北限域のサンゴを育む貴重な自然が残る無人島。

沖ノ島をぐるっと探検してみましょう。今まで知らなかった、気づかなかった自然の営みや、綺麗な貝殻との出会いはきっと新しい海辺の楽しみを発見させてくれます。

豊かな生態の育む海の生き物や、海から繋がる森、打ちあがるたくさんの貝殻・・・・・・・・

沖ノ島は、自然や歴史から感じたり、学んだり、楽しむことが出来る素晴らしいフィールドです。

そして、次世代に守り伝える大切なフィールドです。



■たてやま・海辺の鑑定团的「館山の魅力」人

海から陸を眺めると南房総館山は、森が多い。海の恵みは里・里山・森と海とつながっています。そこで私たちは生きています。

豊かな自然を通じて、四季を感じながら、恵みを教授し、地域の歴史文化を育みながら、また後世に伝え守りながら、様々な活動を通して、人と出会える「生き方」が出来る館山。



<南房総お国自慢>

9. 鴨川市

NPO 法人大山千枚田保存会

発表者 石田 三示

鴨川市で有名なのは、① 鴨川シーワールド、② 亀田病院、③ 大山千枚田 の順でしょう。やはり海（海岸線）が良い。オリンピックのサーフィン会場の誘致活動をしています。日本で最初のサーフィン大会が行われたのは、鴨川です。

漁業、農業も盛んです。鴨川の漁業は「沖締め」をしていて評価が高く、順調に伸びています。農業は、なんといっても「長狭米」。多古米と並んで、おいしいと非常に評判で、なかなか入手できないくらいです。

歴史では、日蓮上人の誕生地である天津小湊の「誕生寺」や「鯛の浦」。彫刻師の「波の伊八」もいます。伊八の作品は、今でも、例えば農家の仏壇の彫りなど、あちこちから発見されています。

その他、「祭り寿司」もあります。元々は夷隅地方のものですが、鴨川でも盛んで、今は月に2回勉強会を開いて、みんなで新作を研究しています。

大山千枚田の紹介をしましょう。大山千枚田は、ご存知のように棚田のオーナー制度で米作りをしています。オーナー制度のほかに、いま力を入れているのが、子どもたちの農業体験（環境学習）です。子供たち、次世代に農業を伝えたいという思いがあります。

地域の食を広く伝えるために農家レストランも開業しました。ここではかまど炊きの長狭米のご飯だけでなく、米粉にして冷麺なども作っています。



<南房総お国自慢>

10. 鋸南町 発表者 篠原 茂幸

団体名	鋸南町 元名花街道
代表者氏名	篠原 茂幸 (事務局長)
テーマ	花を巡り、地域を巡る—ハイキングでつなぐ鋸南の里山・里海—

紹介文

鋸南町では里山の彩りを告げる花のイベントシーズンが12月中旬から始まります。

まずは「水仙まつり」。江月水仙ロード、をくずれ水仙郷、佐久間ダム湖周辺、谷沢水仙郷など山あいの畑では12月から水仙が咲き始め、開花最盛期の1月にはたくさんのハイカーや観光客が訪れます。江戸時代から「元名の花」として江戸で売られていた歴史ある日本水仙は、鋸南町が日本有数の産地となり、今では年間1千万本近くが出荷されています。早春の水仙香る里山の景観は心が和む鋸南町の貴重な財産となっています。

サクラは、2月のカワヅザクラを皮切りに様々な種類が4月までに開花します。カワヅザクラは、原木の苗木が静岡県河津町から分譲されたことがきっかけとなり、平成13年から町内各地の里山に植えられ、今では約1万4千本が植栽されています。源頼朝は、伊豆の石橋山の合戦で敗れ鋸南の地に逃れましたが、房総で再起を図って、のちに鎌倉幕府を開いた史実にあやかり、カワヅザクラを「頼朝桜」とネーミング。毎年2月から3月に「頼朝桜まつり」が開催されます。保田川沿いの頼朝桜の並木を手づくりの竹灯籠で照らす「竹灯籠まつり」、頼朝桜や菜の花咲く保田川沿いや元名花街道を歩くJR「駅からハイキング」も同時期に実施され、大勢の来訪者がまつりを盛り上げます。また4月はじめには約2千本のソメイヨシノが咲く佐久間ダム湖畔で盛大な桜まつりが開催されます。ダム湖畔のサクラ山では、下刈りが年3回、一般町民の参加を募り行われています。

「味わいハイキング」は鋸南ならではの企画といえます。町内各地の里山・里海をハイキングで巡り、個人ではなかなか見ることができないビューポイントや歴史ある地域の宝を名ガイドが紹介してくれます。ゴール近くで地元の農産物や手づくり弁当を味わえるのも魅力になっています。毎月1回実施され、参加申し込みが非常に多く、町外からの参加者が年々増加しています。その他、町内の里山・里海を巡るいくつかのウォーキングコースも設定され、健康づくりや地域再発見の機会となっています。里山の魅力を高め年間通して様々な花の景色を楽しむようアジサイなどの植栽も各地で進められています。

平成27年12月、道の駅保田小学校がオープン。水仙や桜のイベント、農産物販売など里山の魅力発信や観光交流、産業振興の拠点施設として多くの来訪者を迎えています。

写真



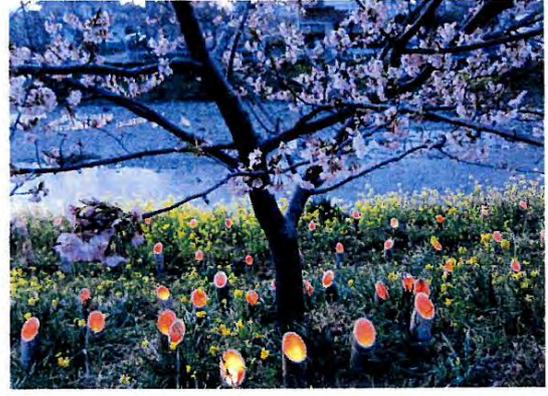
日本水仙咲く早春の里山



江月水仙ロード



賴朝桜と菜の花咲く保田川



賴朝桜照らす竹灯籠



竹灯籠まつり



ソメイヨシノ咲く佐久間ダム湖畔



味わいハイキング



アジサイ周りの草刈作業

<お国自慢を聞いて>

コメンテーター

イオンリテール株式会社 食品商品企画本部

千葉 泰彦 氏

こんにちは。イオンリテール株式会社の千葉と申します。南房総お国自慢を聞かせていただきました。皆さん、どうもお疲れさまでした。どの発表も非常に思いが込められていて、聞いていてすごいと思いました。本当は一つひとつにコメントすべきなのですが、時間の関係で、きょうは総括した形でコメントさせていただきます。

「わがまち」のことを、実際良いこと、すごいことを、もっと広く伝えられれば、もっと良い方向に行くと思います。「残念ながら〇〇はないけれど、△△ならあるよね」という言い方で広げ、つなげていけるとよいですね。

お国自慢の「自慢」とは、自分に関係のあることを褒めるという意味です。「褒める」ことによって自分でも気づくこと、発見があると思います。自分の中でほめて、広める。

私の仕事の中でいつも考えているのは、(お客さまに) 共感を持ってもらわなければだめ、ということです。自分だけが良いと思っているだけではダメなのです。みなさんの活動も同じだと思います。

私は、仕事をするときに、自分のしていることについて、いつも3つの考え方、捉え方でチェックしています。

- (1) 本当に喜ばれているか？ お客さまが満足しているか。
- (2) 差別化できているか？ ライバル店と違いを出せているか。
- (3) やろうとしていることは、儲かるのか。

この3つは、みなさんの活動をするときにも言えることです。ご家庭の奥さんにも言えることです。ぜひ考えてみてください。



南房総の里山の良さがもっと発揮できるよう、もっとこの地に来客が増えるよう、がんばってください。私も、今度は仕事ではなく、遊びに来たいと思っています。

<協力団体紹介>

団体名	低名山倶楽部
代表者氏名	忍足 利彦
団体が活動を開始した時期	平成19年4月～
会員数	10人
<p>◆団体の活動の趣旨</p> <p>房総半島南部の標高の低い山を「房州低名山（ひくめいざん）」と名付け、こうした山の維持・保全を目的に活動している。</p> <p>低名山のほとんどに、山頂標識や案内板がないことから、標識や案内板の設置を続け、安全なハイキングの励行を図る。</p> <p>山開きの日に各地でコンサートを開催する。</p>	
<p>◆活動内容の紹介</p> <p>①山頂に統一デザインの山頂標識を立て、来訪のハイカーに同じ地域の山であることの認識をもたせる。</p> <p>②10月第一日曜日を「低名山 山開きの日」として、各地の山でコンサート活動进行。</p> <p>③ハイキング案内などで、房州低名山の知名度アップを図る。</p> <p>④枝の茂った部分などを切り払い、安全な登山ルートの確保を図る。</p> <p>⑤写真展、講演会、マスメディア出演などを通じ、ハイカーでない人にも房州低名山の魅力を発信していく。</p>	
<p>◆写真</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>高塚山で山開き・大聖院コンサート</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>ハイキングでの案内</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>NHKラジオで語る</p> </div> </div>	
<p>◆年間スケジュール（予定）</p> <p>4月：ハイキング案内</p> <p>5月：登山ルート整備</p> <p>6月：房州の滝案内</p> <p>7月：情報発信</p> <p>8月：情報発信</p> <p>9月：ハイキング案内</p> <p>10月：房州低名山 山開きハイク&コンサート</p> <p>11月：登山ルート整備</p> <p>12月：定期会合</p> <p>1月：ハイキング案内</p> <p>2月：登山ルート整備</p> <p>3月：情報発信</p>	

N P O 法 人 南房総エコネット

5月エコウオーク



10月クリーン作戦



生きもの観察会



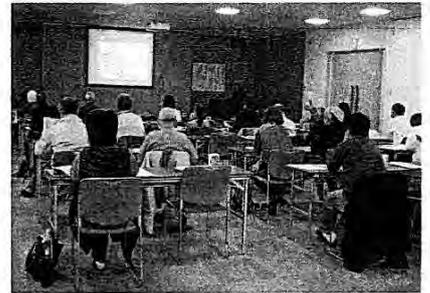
水質調査



11月エコウオーク



市民環境学習会



9月クリーン作戦



随時会員募集中!

NPO法人 南房総エコネットは、南房総市市民環境大学の卒業生を中心に環境保全活動を行うことを目的に平成20年9月に設立され、次のような活動をしています。

- ①環境についての学習、
- ②環境を良くするための活動、
- ③環境を良くするための諸活動への参加・協力

具体的には、上記のような活動をしています。皆さん、一緒に環境保全活動に取り組みましょう

連絡先：NPO法人南房総エコネット事務局(電話：0470-33-1171)

<協力団体紹介>

団体名	高塚山望活クラブ
代表者氏名	山口 弘二
団体が活動を開始した時期	平成23年12月～
会員数	44人
<p>◆団体の活動の趣旨</p> <p>房総半島南部では最高峰の「高塚山」は昔から漁民信仰の山として地域住民に親しまれています。この周辺の自然環境を保全、整備をして地域住民や観光客の憩いの場、交流の場として活性化を図る。具体的には、登山ルート（ハイキングルート）の整備や眺望を復活させ、地域住民や観光客とのハイキングを実施し、機能的な交流の場づくりを目指す。</p>	
<p>◆活動内容の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年前に七浦幼稚園、七浦小学校が閉校となり、その記念として生徒78名が高塚山山道、山頂に桜の木を植えたが約20本が枯れてしまったため、桜の木の提供を市役所にしてもらい植え替えた。 ・高塚山までのハイキングコースは5コースあるが、白間津からのコースがなかったのでコースの探索。 ・高塚山ハイキングコースの休憩所、山頂、一等三角点に休憩用の椅子を設置した。（全部で11脚） ・ハイキングを3回実施。その都度、チラシづくりを実施し、関係部署に配布。房日新聞3回、みんなネット7回投稿。ハイキングマップを2,000部作成し、関係部署に置かせてもらいアピールした。 	
<p>◆写真</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <p>高塚山山頂からの眺望</p> <p>白間津コースの探索</p> <p>ハイキングの様子 (山頂にて高塚山○×クイズ)</p> </div>	
<p>◆年間スケジュール（予定）</p> <ul style="list-style-type: none"> 4月： 定期総会、チャレンジ事業資料作成及びプレゼンテーションに参加 5月： 休憩椅子の設置、ハイキング1回目（七浦地区の神社、仏閣、祠等） 6月： 小冊子作成のため、七浦地区の神社、仏閣、神事等の調査 7月： 小冊子作成のため、七浦地区の神社、仏閣、神事等の調査 ※小冊子作成の校正までの間行う 8月： ハイキング2回目 9月： 山道休憩所の枝払い。前半の反省と今後についての話し合い。 10月： 小冊子作成。ハイキング3回目（白間津口→高塚山→平磯口） 11月： 山道休憩所の枝払い。休憩椅子の設置。 12月： 案内板の確認、追加。 1月： ハイキング4回目（大聖院→高塚山） 2月： 29年度、実施予定事項の確認 3月： 28年度の反省会及び事業総括報告書の作成。 	

<協力団体紹介>

(有)みねおかいきいき館

いきいき体験共和国

<心に響く体験を！23種類の体験コース>

豊かな自然の中で、五感を働かせ、感性を育む。
体験学習を通して、自然とのかかわり、食への関心、感動する心などの豊かな人間性と、たくましくしなやかな心を持つ子ども達の育成をめざしています。

〒299-2507 千葉県南房総市大井681-2

TEL. 0470-46-8611 FAX. 0470-46-8612



<協力団体紹介>

団体名	自然の宿 「くすの木」
代表者氏名	上区自治会長 田村敏夫
団体が活動を開始した時期	平成9年（1997年）12月～
従業員数	26人

◆紹介文

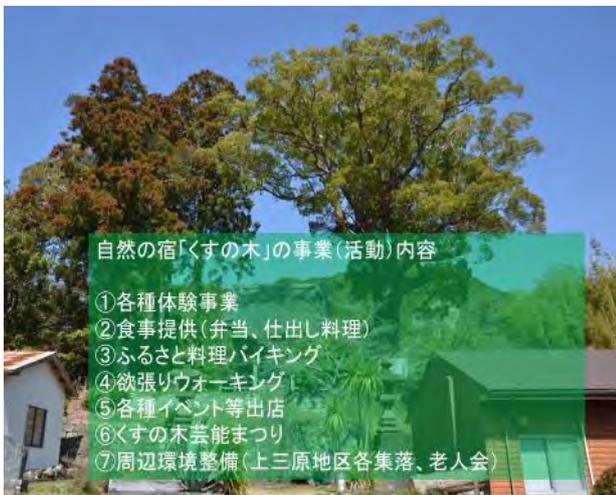
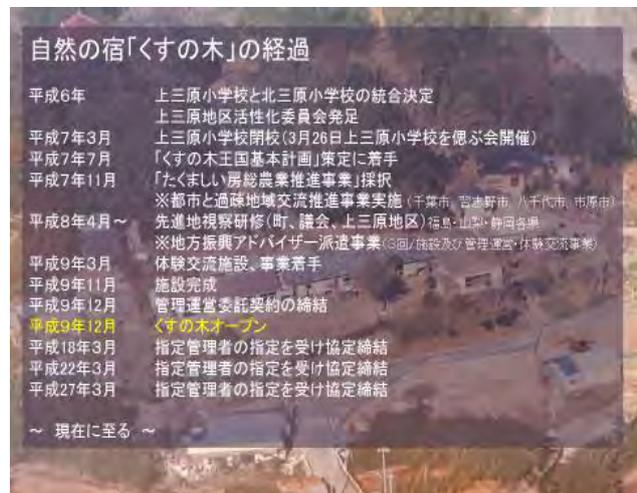
平成7年に廃校となった上三原小学校の跡地を利用して、体験交流型の宿泊施設として、平成9年にオープンした。校舎はリニューアルし、宿泊室、食堂、浴室等の整備をした。

講堂は当時のまま残し、メモリアルなスペースとなっており、体験活動等に使用され、有効に機能している。南房総市から指定管理者の指定を受け、地元自治会（上区自治会）が運営管理を行っている。食事は、田舎ならではの採れたての新鮮な食材を提供する。

年中無休で営業しており、宿の経営のほか、竹細工・寿司づくり等各種体験、食事提供やイベント参加等も行っている。

施設の「くすの木」という名称は、建物の裏側にそびえる千葉県天然記念物「大樟」（樹齢750年）に因んで命名された。

◆写真紹介



<協力団体紹介>

団体名：外房捕鯨株式会社

代表者氏名：庄司義則

創立年：1949年

<会社の業務の内容>

房州（房総半島南部）は、江戸時代初期にはツチ鯨を対象とした古式捕鯨が内房の勝山（現鋸南町）で始まり、現在でも南房総市和田町においてその捕鯨活動が、房州一円に広がる伝統的な鯨食文化と共に引き継がれています。

外房捕鯨(株)は、その房州捕鯨の歴史の流れを汲んだ当地に唯一残っている沿岸捕鯨会社であり、北海道の網走市、宮城県石巻市鮎川及び和歌山県太地町と共に、日本に4つ残された沿岸捕鯨基地の一翼を担っています。なお、江戸時代より房州捕鯨の捕獲対象であるツチ鯨は、国際捕鯨取締条約の管轄外の鯨種故に、水産庁の管理の下、その商業目的での捕獲（要するに通常の漁業）が認められており、和田漁港でのその解体風景（画像②）は、当地の名産品である「鯨のたれ（鯨肉の干物）（画像④）」を干す風景（画像⑤）と共に房州の夏の風物詩ともなっています。

外房捕鯨(株)は捕鯨船第51純友丸を保有し（画像①）、夏にはツチ鯨を捕獲して和田の鯨体処理場において、その解体作業を行っています（画像②）。地元の小学校5年生を対象に解体作業を見学させる捕鯨・鯨学習（画像③）は16年の歴史を誇り、特徴のある教育活動として、国内のみならず、海外のメディアからも注目されています。

画像①



画像②



画像③



画像④「くじらのたれ」商品画像



画像⑤「鯨肉を干す風景」



以上

ふるさとを知れば ふるさが好きになる。さがせば どこにでもある 歴史。

真 浦 天 畑 保 存 会

耕作放棄地で花育と里山づくり

天畑履歴

1,960年12月より、**56年**掲載中。千葉県小学校社会科

副読本：「すすむ千葉県」：花づくりと間宮七郎平紹介

小説「花」：「間宮七郎平と和田の花」：「よみがえった水仙」：「世界花の旅」

美しい日本の村景観：小さな旅「明日を彩る花畑」：千葉県誌「ニューライフ千葉」

2,008・6・27

真浦天畑の再生と農業足跡の伝承

耕作放棄地を花育の場に：水仙・きんせん花・菜の花・コスモス・・・ 植栽

〃 〃 を里山に：花桃・元朝桜・河津桜・椿・アジサイ・アスナロ・・・ 植樹

2,011・1・11 「**荘川桜**」実生苗植樹（Jパワー）：ハーフ成人式

2,012・1 池坊月刊誌「**華道**」 女性月刊誌「**装苑**」

2,014・10 「**全国花のまちづくりコンクール**」受賞

2,015・9 ちばテレビ「**房州海女と花物語**」

里ENJOYSE
楽しむこと

3・4年生が育てた花を、卒業式に **ありがとう** の花として飾る。

復興した天畑



きんせん花の植栽



菜の花・きんせん花の収穫



菜の花・きんせん花で飾られた卒業式会場



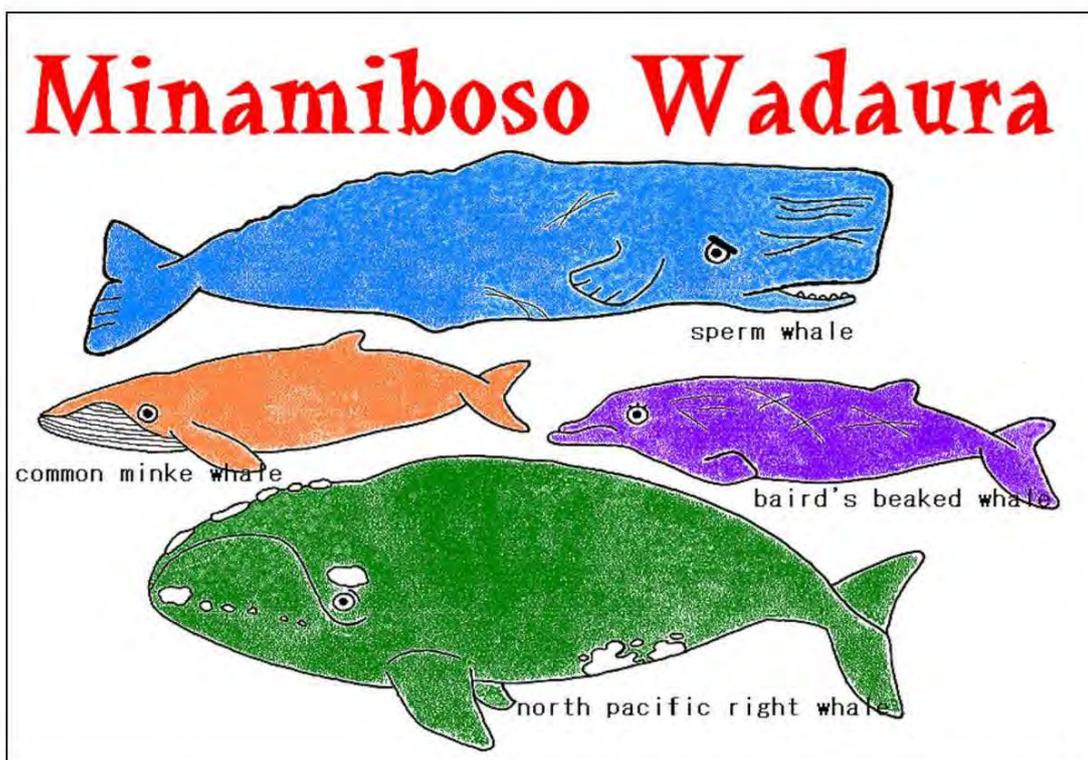
幼稚園児に地元ゆかりの紙芝居



草刈作業ボランティア募集中!!!

真浦天畑保存会: 南房総市和田町真浦96 s-tuzi@awa.or.jp
URL: 南房総みんなネット⇒真浦天畑保存会 辻 貞夫

和田浦くじら食文化研究会



鯨食文化を守るため、和田浦のつち鯨はもちろん、調査捕鯨の副産物(ミンク・ナガス・ニタリ鯨など)調理しております。

H28年現在会員数20

- 【食事処】 うな陣、わだうら、ぴーまん、さかな、笑福、かねす、なぎさ、新都、ステラ、二久や、カーサ・フローラ、舞花、典膳
- 【宿泊処】 安田、じんざ、長吉、沖見屋、くすの木
- 【お菓子処】 盛栄堂
外房捕鯨(株)

会場風景・パネル展示







撮影 田中 正彦

閉会の挨拶

里山シンポジウム実行委員 風間 俊雄

里山シンポジウム実行委員会の風間です。
ご指名ですので、閉会の挨拶をさせていただきます。

本日は皆様お忙しい中、「第13回里山シンポジウム in 南房総、2016」にご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

お陰様でかくも盛大のうちに終わることが出来ました。これもひとえに協力いただきました皆様のおかげと感謝申し上げます。



今回のテーマ『里山 里海の恵みと食』、サブテーマ『南房総のお国じまん』と銘打って、1年前から本日のに向けて計画してきましての集大成が無事に終わることが出来まして、最初から関わってきました私としても感無量です。

今回のシンポジウムに際して、南房総地区の（市民団体・行政）のチームワークの良さが為せる結果と敬意を表したいと思います。

自然がたっぷりの南房総地区にふさわしい（お国じまんも）嬉しく拝聴いたしました。

基調講演をして頂きました延藤先生の（風の人・土の人）も南房総地区にまことにふさわしい題材でありましたし、本日も市外から大勢の風の人たちが参集くださいました。はるばる台湾のお国からも来てくださいました。

「土の人たち」（地元の方たち）の活動もこれからますます活発に推移されることと思います。今までの点の活動が、これを機会に線の活動、面の活動に発展することは間違いありません。

どうぞ今回のシンポジウムをお祭りごとに終わらせず、新しい出発点として、ネットワークを強化し南房総地区の更なる発展をされることをお祈りいたしまして、閉会の挨拶といたします。

本日はまことにありがとうございました。

里山シンポジウム実行委員会委員 風間俊雄さんを偲んで

2016年11月22日、風間俊雄さんが旅立たれました。誰よりも里山シンポジウムを愛し、支えてくださった風間さんに送る言葉と共にこの報告書を捧げたいと思います。

送る言葉

ちば里山センター理事であった風間俊雄様が平成28年11月22日に自宅で奥様の見守る中で静かに一生を終えられました。

思えば、ちば里山センター理事会では、参加者10名の中で私はいつも風間様の隣に座っていました。平成27年5月末の理事会に於いて、金親会長から平成28年度の里山シンポジウムの開催地がなくて困っているとの発言がありました。その席で私が南房総の状況を説明し、私自身は高齢でありできませんがと申しあげましたところ、隣席の風間様から、横山さんならできる、応援するからとの強いことばを頂きました。

そこで、南房総での開催を検討することとなり、南房総市副市长等開催の趣旨や、直近の実績報告等を持参して、風間様が説明にきて下さいました。この結果、南房総市として協力を約束していただきました。県域及び南房総市で開催した実行委員会には、欠かさず参加して助言して頂き開催することができました。大成功で終えた「第13回里山シンポジウム in 南房総」は、風間様の熱意あればこそ開催することが出来たと思ひ、心より感謝申し上げます。

報告書が完成しましたらぜひ墓前にささげたいと思います。

里山シンポジウム南房総実行委員会会長 横山 武



2015年1月28日 台湾美濃

台湾のわれら（国家公園協会、美濃愛郷協会と高雄師範大学など）がいちはら里山クラブの風間会長のお蔭で2013年8月27日から3年間大変お世話になりました。短い期間でも里山に関する勉強とずいぶんいろんな体験の可能性を楽しく実現させていただき、誠にありがとうございました。ご苦労様でした。永遠な風間会長、どこにいても夢を続けて造りましょう。

～ Rest in Peace! さようなら！

高雄師範大学 劉 淑恵

風のように逝ってしまった風間さん。だれよりも里山シンポジウムのことを気にかけて、心をくぐらせて下さいました。今でも「やあ！」と大きな声で手を挙げて、にこにここと答えてくれそうな気がします。いつも笑顔でみんなを和ませ、なんでも受け止めてくださいました。まだまだ里山のこれからを一緒に語り合いたかった、いろいろ教えていただきたかった、たき火を囲んでおしゃべりしかった……。きっと空から「何を心配しているの。やってみれば答えは見つかるよ」と私たちを見守って下さっていることなのでしょう。ありがとうございました。

里山シンポジウム実行委員 ちば環境情報センター代表 小西由希子

<広告>

自然環境を考慮して再生可能エネルギーの
普及を目指しています

エネライフ南房総（株）

〒299-2503 千葉県南房総市石堂244-1
TEL. 0470-46-2206 FAX. 0470-46-3100

(有)みねおかいきいき館

<ソフトクリーム&山菜料理>

いきいき体験共和国

<心に響く体験を！23種類の体験コース>

豊かな自然の中で、五感を働かせ、感性を育む。体験学習を通して自然とのかかわり
食への関心、感動する心などの豊かな人間性と、たくましくしなやかな心を持つ子ども
達の育成をめざしています。

〒299-2507 千葉県南房総市大井681-2
TEL. 0470-46-8611 FAX. 0470-46-8612

営業時間 9:00~17:00(年中無休)

<食のテーマパーク>

南房総市道の駅ローズマリー公園内

はなまる市場

〒299-2521 千葉県南房総市白子1501
TEL. 0470-28-4030 FAX. 0470-28-4031

ホームページ <http://www.hanamaruitiba.com/>

季節の彩りを感じる宿



旅館 沖見屋

雄大に広がる太平洋を眼前に、ごゆっくりとお過ごしてください。食事は新鮮な地の磯魚や鯨料理をお楽しみください。

〒299-2715 千葉県南房総市和田町下三原393

TEL & FAX 0470-47-2050

ホームページ <http://ryokan-okimiya.com/>

一年中桜の咲く里山づくり

安馬谷里山研究会

☆4. 2haを年二回の草刈、徐間伐、苗木作り

桜130種類1,500本、椿、梅、ミモザアカシア、つつじ等植樹

☆安馬谷里山の道がセラピーロードに認定される

☆年三回の里山ハイキング

3月下旬 山桜と若芽を楽しむウォーク(全行程3.5km)

春風に吹かれながら、里山の自然に触れてみませんか？

6月中旬 若葉と花菖蒲見学ウォーク

1,000株の花菖蒲がお出迎え

本年は、6月12日(日)10時に安馬谷青年館を出発し、15時帰着解散

11月下旬 紅葉と落ち葉ひろいウォーク

秋風に吹かれながら、里山の自然に触れてみませんか？

☆お問い合わせ先 〒299-2522 千葉県南房総市安馬谷514
横山 武

TEL & FAX 0470-46-3154

携帯電話 090-2758-2407

<広告>

和田浦くじら食文化研究会 会員の宿

四季の宿 じんざ

関東唯一の捕鯨基地 和田漁港水揚げ・解体のつち鯨
他、調査捕鯨のミンク・ニタリ・イワシ・ナガス鯨など、
鯨のフルコースをご堪能いただけます。

Tel: 0470-47-2252

E-mail: jinza@basil.ocn.ne.jp

<http://oyado-jinza.com/>



カラオケ居酒屋
飲んで歌って踊れる店

舞

まいはな

花

※小宴会・グループ等ご予算に応じます。

TEL 0470-47-2313

南房総市和田町中三原29-1

千葉在来野呂そばで地元と都市部の交流をしています！

「ひだまりの郷」



連絡先 ひだまりの郷 代表 押元真理子 携帯 090-3040-1249

第13回 里山シンポジウム in 南房総
2016年5月15日(日)
南房総市立嶺南中学校和田校舎

◆ 里山シンポジウム実行委員会

並木 秀幸(代表)

荒尾 稔 尾形 孝和 小倉 久子 風間 俊雄 金親 博榮 木下 敬三
栗原 裕治 桑波田和子 小西由希子 佐藤 聰子 澤口 晶子 鈴木 優子
高橋 和靖 田中 正彦 手塚 幸夫 中村 俊彦 林 みね子 稗田 忠弘
宮寺 卓 (50音順)

◆ 里山シンポジウム南房総実行委員会

横山 武(会長)、栗原 猛(副会長)

朝倉 常夫 足達 乙松 石井 賢司 石井 英毅 石田 三示 上野 勝美
遠藤 勇 岡村 隆 忍足 利彦 片桐 俊英 川名 修 北見 和美
黒川 一夫 後藤知恵子 小原 靖喜 近藤 克之 坂本 文吉 笹子 全宏
笹子 諒 佐藤 泰幸 篠原 茂幸 庄司 義則 神保 清司 菅沼 弘夫
鈴木 和明 鈴木勇太郎 高田 博 竹内 聖一 竹林 幸雄 竹生田茂樹
田村 靖夫 辻 貞夫 羽太 辰一 堀内千鶴子 堀内 英哉 前川 鎮男
松葉 敏道 松本 貢 村田 隆史 八木 幸枝 山口 健司 山口 弘二
山口せつ子 山口 惣司 渡辺 俊彦 (50音順)

第13回 里山シンポジウム in 南房総 報告書

—里山里海の恵みと食—

発行 : 里山シンポジウム実行委員会

発行日 : 2017年3月1日

編集委員長 : 小倉久子

編集委員 : 佐藤泰幸、笹子全宏、小西由希子、中村俊彦、桑波田和子

連絡先 : 里山シンポジウム実行委員会 代表 並木秀幸

Email: namiki.hideyuki@gmail.com

里山シンポジウム実行委員会公式HP <http://www.satochiba2.jp/>

「第13回里山シンポジウム in 南房総」は、ちば環境再生基金の助成を受けて実施しました。

里山に託す私たちの未来

第13回里山シンポジウム in 南房総

「里山里海の恵みと食」

第13回里山シンポジウム in 南房総 報告書